田野町文化財調査報告書第33集

本野遺跡（2）

（弥生時代の調査）

平成４年度県営農地保全整備事業元野
地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０００

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

例　　言

1．本書は、平成４年度県営農地保全整備事業元野地区に伴い、田野町教育委員会が実施した『本野遺跡』発掘調査のうち、弥生時代の遺構・遺物についてを報告するものである。調査は宮崎県中部農林振興局からの受託事業と、農地所有者負担分については国庫補助事業を得て行った。

2．調査は次の体制で実施した。

調査主体	田野町教育委員会	
	教　育　長	鍋倉　政信（平成４年度）
		堀内　　侃（平成11年度）
	社会教育課長	前田　久育（平成４年度）
		永谷　　弘（平成11年度）
	同補佐兼係長	長友　啓泰（平成４年度）
	同　係　長	有村　勝弘（平成11年度）
	同　主　査	森田　浩史（調査担当）
	同　主　任	金丸　武司（室内調査担）
	調査補助（室内作業員）	[redacted]（平成４年度）
		[redacted]（平成11年度）
	発掘作業員	田野町在住者・山之口町在住者有志
調査協力指導	宮崎県教育庁　文化課	

3．調査にあたっては、業務の一部を下記の業者に委託した。

ラジコンヘリによる遺構写真測量及び写真撮影「株式会社スカイサーベイ」

各種自然化学分析調査「株式会社古環境研究所」

4．本書の編集は金丸ならびに室内作業員の協力を得ながら、主に森田が担当した。

5．本書で用いた色調は農林省農林水産技術会事務局監修の『標準土色帳』を参考にした。

6．本書に用いた方位は磁北、標高は海抜高である。

7．本書に掲載したすべての資料は田野町教育委員会文化財調査事務所で保管している。

Tel（0985－86－5160）

本　文　目　次

第Ⅰ章　序説
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
第Ⅱ章　調査の結果
第１節　調査の方法と概要 …… 5
第２節　弥生時代の調査結果 …… 5
第３節　本野遺跡の自然化学分析 …… 26
第４節　まとめ …… 31

図　版　目　次

第１図　町内主要遺跡分布図 …… 2
第２図　調査区周辺地形図 …… 4
第３図　Ｅ・Ｆ区竪穴住居分布図 …… 6
第４図　SA－01・04実測図 …… 9
第５図　SA－02・12実測図 …… 10
第６図　SA－03 …… 11
第７図　SA－05 …… 12
第８図　SA－06・10 …… 13
第９図　SA－07 …… 14
第10図　SA－08・09 …… 15～16
第11図　SA－11 …… 17～18
第12図　SA－13 …… 19
第13図　弥生時代の出土遺物（土器） …… 20
第14図　弥生時代の出土遺物（土器） …… 21
第15図　弥生時代の出土遺物（土器） …… 22
第16図　弥生時代の出土遺物（土器） …… 23
第17図　弥生時代の出土遺物（石器） …… 25

表　目　次

表１　出土遺物観察表（土器） …… 24

写真図版目次

図版１　（調査前全景）（Ｅ・Ｆ区調査状況）……33
図版２　（Ｅ・Ｆ区調査状況）……34
図版３　（Ｅ・Ｆ区調査状況）……35
図版４　（SA－01）……36
図版５　（SA－02）（SA－03）……37
図版６　（SA－03）……38
図版７　（SA－04）……39
図版８　（SA－05）……40
図版９　（SA－06）……41
図版10　（SA－07）……42
図版11　（SA－07）……43
図版12　（SA－08・09）（SA－08）……44
図版13　（SA－09）……45
図版14　（SA－10）（SA－13）……46
図版15　（SA－11）……47
図版16　（SA－11）……48
図版17　（SA－12）……49
図版18　出土遺物（SA－01）……50
図版19　出土遺物（SA－04）……51
図版20　出土遺物（SA－04・11）……52
図版21　出土遺物（SA－04・09）……53
図版22　出土遺物（SA－05）……54
図版23　出土遺物（SA－06）……55
図版24　出土遺物（SA－07）……56
図版25　出土遺物（SA－07）……57
図版26　出土遺物（SA－09・10・13）……58
図版27　出土遺物（SA－11）……59
図版28　出土遺物（石器）……60

第Ⅰ章　序　　説

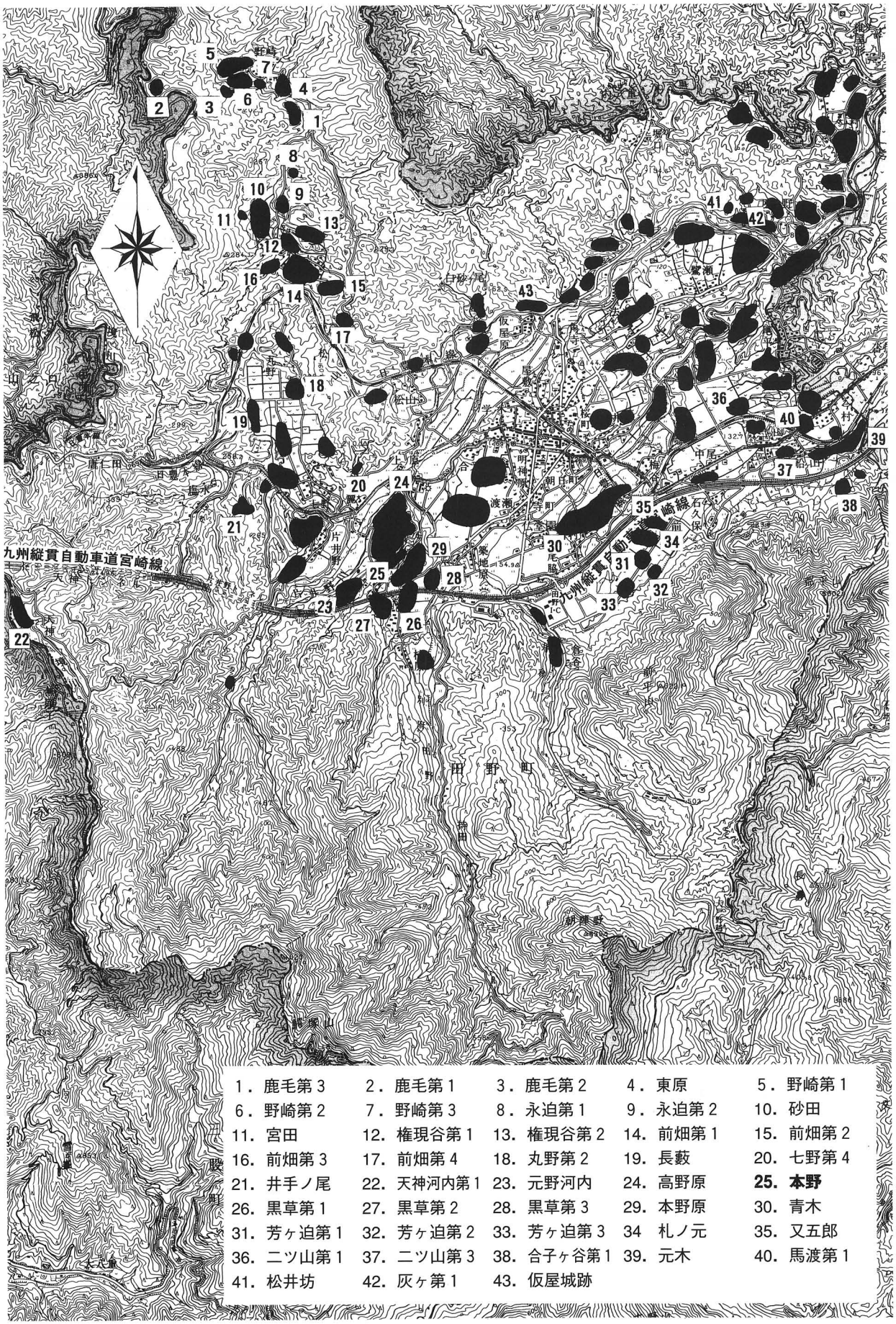
第１節　調査に至る経緯

田野町では前平地区・七野地区・八重地区などで農地整備に関連する事業が実施されてきたが、平成４年度から元野地区においても大規模な県営農地保全整備事業に着手することとなった。平成４年度の工事着工が計画された本野工区は、平成元年度に町教育委員会で実施した町内遺跡詳細分布調査において確認された周知の遺跡（本野遺跡）であったため、その保存等について早急に協議検討する必要が生じ、平成４年２月に県文化課が詳細確認のための試掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代から弥生時代にかけての複合遺跡であることが確認された。その後、県文化課と宮崎県中部農林振興局の間で協議が行われ、同年９月22日には町教育委員会を含めた３者で遺跡の保存方法などについての具体的な協議を行ったが、工事施工上で盛土あるいは現状での保存が困難な部分について、発掘調査による記録保存の措置をとることとなった。平成４年10月８日付けで宮崎県中部農林振興局と委託契約書を締結し、現地における調査は同年10月16日より着手、翌年１月28日に完了した。

第２節　遺跡の位置と歴史的環境

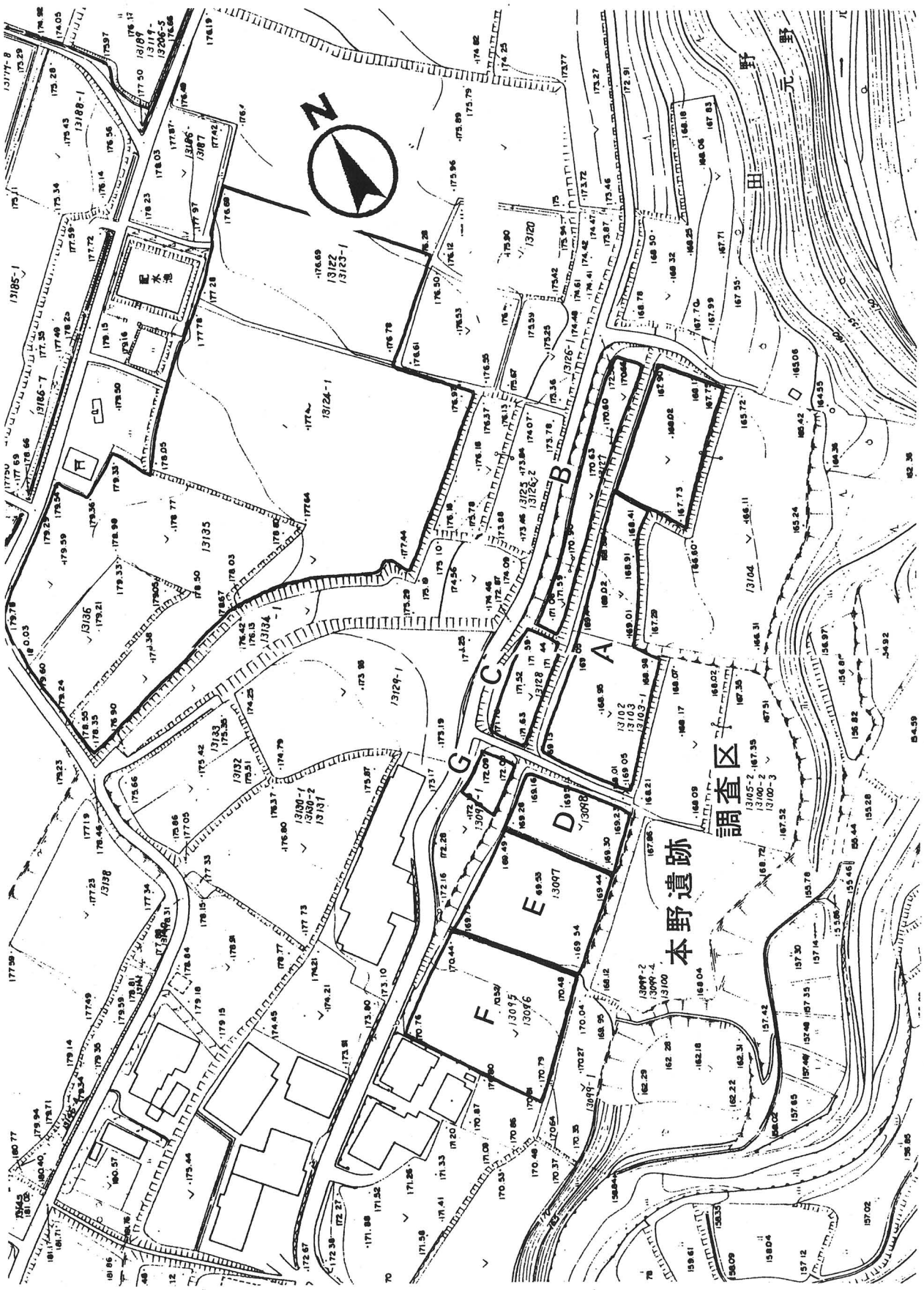
本野遺跡は、鰐塚渓谷を源流とする元野川左岸の河岸段丘上に位置する。西側の片井野川と東側の別府田野川に挟まれたこの一帯は豊富な水源を有し、町内でも有数の遺跡が集中する地域でもある。本遺跡の対岸に位置する本野原遺跡は昭和46年の宮崎大学史学研究部考古学班による調査で市来式土器・綾式土器が出土したほか、平成６年度に県文化課が実施した試掘調査でも縄文時代早期と後・晩期の遺構遺物が確認された。現在でも一帯を踏査すると遺物が包蔵された状態を容易に観察することができる。また、聞き取りのみではあるが地下式横穴墓も所在するといわれている。別府田野川左岸に位置する畑田遺跡では、平成10年度の発掘調査により縄文時代晩期の住居跡と土坑、近世～近代の掘立柱建物と溝が確認され、縄文時代早期・晩期、弥生時代、平安時代、中世～近世・近代に至る幅広い時代の遺物が出土した。中でも縄文時代晩期の土坑から出土した組織痕土器は、今後同時代の研究資料として注目されるであろう。本野遺跡が所在する元野川左岸には、他に高野原遺跡と元野河内遺跡があり、近年の県営農地保全整備事業に伴って既に大半の部分で発掘調査を終了している。高野原遺跡は平成４年度（地中レーダー探査のみ）５～７年度の調査により、各年度において縄文時代早期の遺構遺物が出土したほか、平成６年度の調査では縄文時代後晩期かとみられる掘立柱建物（現在整理中）と竪穴住居、弥生時代の日向型間仕切りを含む竪穴住居、地下式横穴墓、中世の掘立柱建物などが検出された。元野河内遺跡は平成８年度の調査により、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期の集石遺構と遺物、同前期～後期の土器などが出土した。

以上のように、当地域一帯は断続的ではあろうが長期にわたって集落が営まれていたことがわかる。町内には他にも前平地区遺跡群（札ノ元・芳ケ迫第２ほか）七野地区遺跡群（丸野ほか）八重地区遺跡群（砂田ほか）鹿村野地区遺跡群（ズクノ山第２・前ノ原第２ほか）などの遺跡密度の濃い地域が見ら



第1図　町内主要遺跡分布図

れる。しかし、いずれも縄文時代を中心とする遺跡であり、弥生時代のまとまった集落跡は船ケ山地区の元木遺跡以外に発見されていない。これに対し、元野地区では本野遺跡と高野原遺跡で中期末から後期の竪穴住居跡群が検出されている。また、古墳時代についても灰ケ野地区の灰ケ野第１遺跡で地下式横穴墓の発見が報告されているのみにとどまるのに対し、いずれも集落跡の発見は無く、現在のところ墓域としての認識にとどまるが、本野遺跡と高野原遺跡では前述したような状況である。古代・中世以降になると集落跡や山城の分布などの様相に大きな変化がみられるものの、豊かな水資源を有する当地区周辺が弥生時代以降の田野盆地エリア内において中心的な位置を占めていたことを想定できよう。



第２図　調査区周辺地形図

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　調査の方法と概要

元野川左岸の河岸段丘上に位置する本野遺跡は、元野地区高野原の台地縁辺にあたり農道を挟んで高野原遺跡と画される。事業地内は畑地であり、その大半が調査の対象となったため、廃土の置き場など作業効率を考慮して便宜的にＡ～Ｇの調査区を設定し、Ａ～Ｄ区の作業を完了した後にＥ～Ｇ区へ移行するという方法を取らざるをえなかった。実質調査面積は約に至る。作業は重機により耕作土を除去し、遺物包含層から赤ホヤ堆積層直上までを精査しながら掘り下げ、同直上面において遺構を検出することを目的とした。当初は試掘調査のデータから、主な対象として弥生時代の集落跡を想定したが、これに加えて縄文時代遺物が大量に出土する結果となった。本野遺跡の地層は、耕作土から赤ホヤ堆積層の間に存在する御池軽石混入層とその前後が遺物包含層である。遺構検出は主にアカホヤ堆積層上面において行ったが、特にＥ・Ｆ区西側の一部ではアカホヤ下位までの削平も見られた。しかし、ここから更に西側の高野原遺跡へ至るまでは、やや急な斜面を呈しており本調査への影響はそれほど無かったものと考えている。

調査の結果、Ｅ区とＦ区において竪穴式住居跡を13棟検出した。これらはやや不整形なものを除いて基本的に方形である。この方形住居のうち２棟は隅部の一箇所に方形の張り出しを有するものである。本遺跡と農道を隔てて北側の高野原遺跡では、花弁状住居などの間仕切りや突出部を有する竪穴式住居群を検出しているが、両遺跡の時期的な関係などについて未だ検証していない段階であるので、ここでは事実関係の報告に留めることをご理解いただきたい。

尚、遺構図版中の（　）内の番号は遺物図版中の番号に対応する。これ以外の遺物番号は現地調査時における取り上げ番号をそのまま記したものである。当調査事務所に保管している資料との照合時に活用できればと考えた。

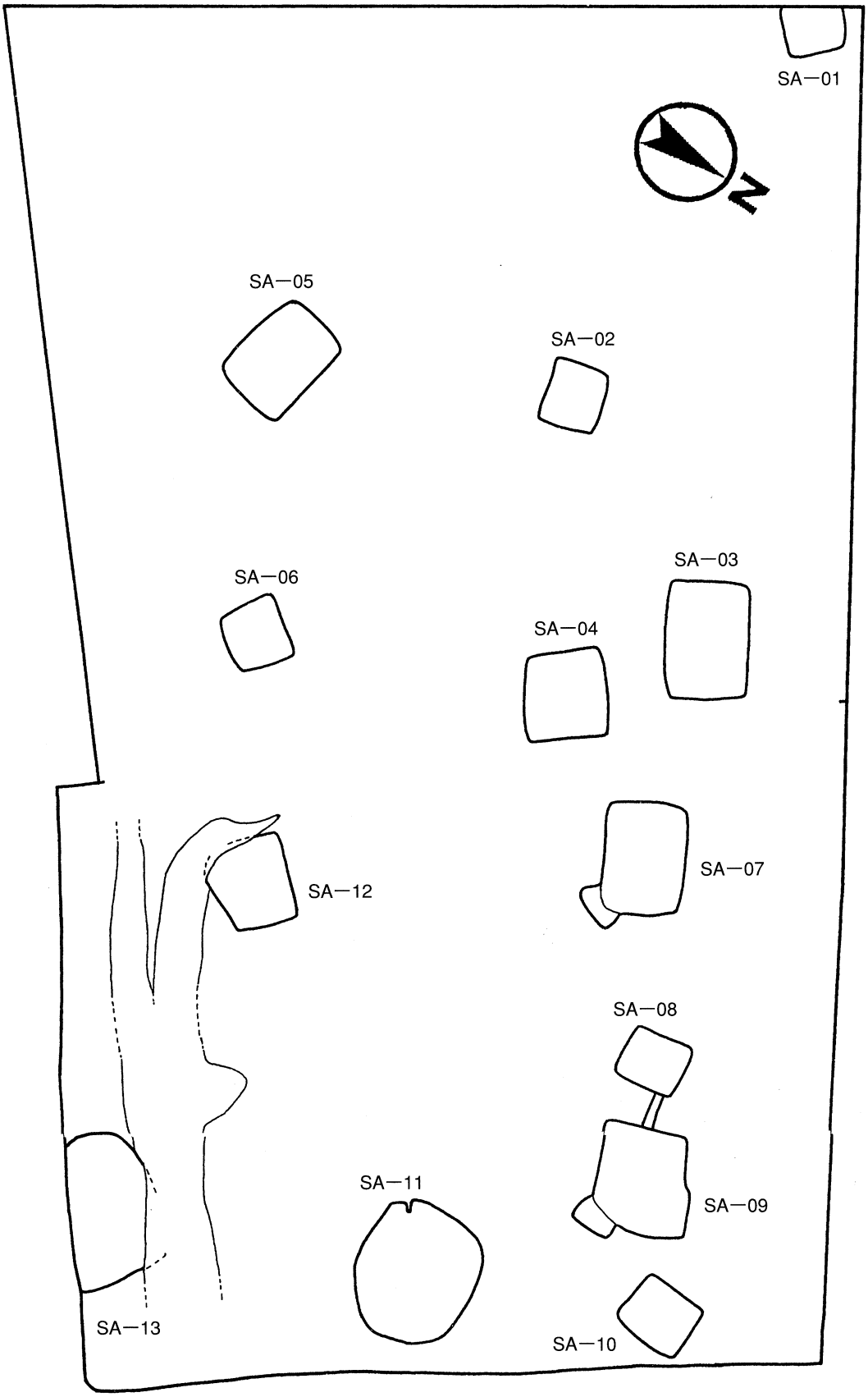
また、本遺跡の縄文時代については平成11年度に報告済みであるため、詳細は同報告書を参照されたい。

第２節　弥生時代の調査結果

ここでは本野遺跡調査区のうちＥ・Ｆ区において出土した弥生時代の竪穴住居を中心に報告する。出土遺物の詳細については観察表を参照されたい。また、文中の「主軸」という表現については住居の方位を示すために便宜的に使用したもの、「礫」は円礫を含めた石器以外の石の総称として使用したものである。

【SA－01】

Ｆ区西側の民家との境界で検出した。検出面からの深さはcm以内で残存状態は良くない。一辺は276cmである。約半分が民家敷地内にあるため規模や形状の詳細は把握できなかったが、現状で見る限



第３図　E・F区竪穴住居分布図（S＝１/300）

り小規模でややシャープさを欠く方形のプランを呈するものと考えられる。遺物は、床面直上付近からほぼ完形の壺形土器（1）ほか土器片と切目石錘（53）が出土した。

（1）は土圧によるためかかなりの歪みがみられる。現状では丸底に近い形状を呈しているが特に底面の摩滅が著しく、原型を留めていない。

【SA－02】

F区の中央よりやや西寄りの地点で検出した。検出面からの深さは約25cmで、272cm×291cmの小規模な方形プランを呈する。主軸がW14°Sを向く。柱穴は検出できなかった。遺物は覆土内から土器の小破片と軽石、礫、炭化物が少量出土した。

【SA－03】

F区の北側で検出した。検出面からの深さは約34cmで、379cm×550cmの長方形を呈する。主軸がE20°Nを向く。柱穴は東西にそれぞれ一箇所ずつ検出した。遺物は覆土内から土器の小破片と礫がごく少量のほか、炭化材が出土した。

【SA－04】

SA－03から南東に約3mの地点で検出した。検出面からの深さは約46cm、375cm×379cmで北東側に若干開き気味の方形を呈するが東側隅はやや歪である。短辺がE31°Nを向く。柱穴は東西にそれぞれ一箇所ずつ検出した。遺物は覆土内から壺形土器（6）甕形土器（4・5・7～24）を含む土器片と磨製石鏃（50）、砥石（54）礫、炭化物が出土した。

甕形土器には刻み目突帯を有するもの（4・10・17・18・24）と有さないもの（5・8・9・11・13・19～22）がある。底部は上げ底を呈するもの（16・23）とやや上げ底のもの（15）と平底（7・14）とがある。

【SA－05】

F区の中心からやや南側で検出した。検出面からの深さは約27cmで、375cm×473cmの長方形を呈する。主軸がW14°Nを向く。柱穴は東西にそれぞれ一箇所ずつ検出した。遺物は覆土内から壺形土器（25～28）のほか土器片と磨製石斧（57）、礫などが出土した。

（26）は口縁部にかけて開くもの、（27）は胴部に膨らみをもつもので、いずれも小型の平底を呈し、ほぼ完形である。

【SA－06】

F区の東側で検出した。検出面からの深さは約28cmで、267cm×298cmの西壁側がやや開く方形を呈する。主軸がN36°Eを向く。柱穴は東西にそれぞれ一箇所ずつ検出した。遺物は覆土内から甕形土器（29）ほか土器片と礫が出土した。

（29）は上げ底を呈するもので、その形状から見て突帯を有さないタイプのものと考えられる。

【SA－07】

F区の西側、SA－03から東方へ約5mの地点で検出した。検出面からの深さは約54cmで、366cm×493cmの長方形プランに加え、東壁隅に105cm×200cmのやや崩れた方形の突出部を有している。主軸がE17°Nを向く。床面からは柱穴と見られるものを含めて12カ所のピットを検出した。遺物は覆土

内から壺形土器（33）と甕形土器（30・33）ほか破片と磨製石鏃（47・52）、砥石（55）、礫などが、突出部の床面直上付近からは壺形土器（31）が出土した。

（33）はやや散乱した状態で出土したが、接合の結果完形品となったものである。

（31）は耕作の影響を受けたためか１／３強を残すのみであるが、ほぼ横倒しの状態で出土した。これが本来人為的に置かれたものかは不明である。

【SA－08】

SA－07から北東へ約5.2m、SA－09から西へ約1.9mの地点で検出した。検出面からの深さは約20cmで、240cm×283cmの小規模な方形プランを呈する。主軸がN２°Sを向く。柱穴は検出できなかった。遺物は覆土内から甕形土器（34）を含め小破片と礫が出土した。

【SA－09】

SA－10から南西へ約1.8mの地点で検出した。検出面からの深さは約57cmで、426cm×460cmの長方形プランに加え、東壁隅に121cm×210cmのやや崩れた方形の突出部を有しており、SA－07と同様のタイプである。主軸がW19°Sを向く。床面からは柱穴と見られるピットを１箇所検出した。遺物は覆土内から土器の小破片と礫が少量出土したのみである。

【SA－10】

E区の北東隅で検出した。検出面からの深さは約22cm、267cm×299cmの僅かに東側へ開く方形プランを呈する。主軸がN７°Eを向く。柱穴と見られるピットを３カ所検出した。遺物は覆土内から壺形土器（37）と甕形土器の底部（35・36）を含め小破片と礫が出土した。

【SA－11】

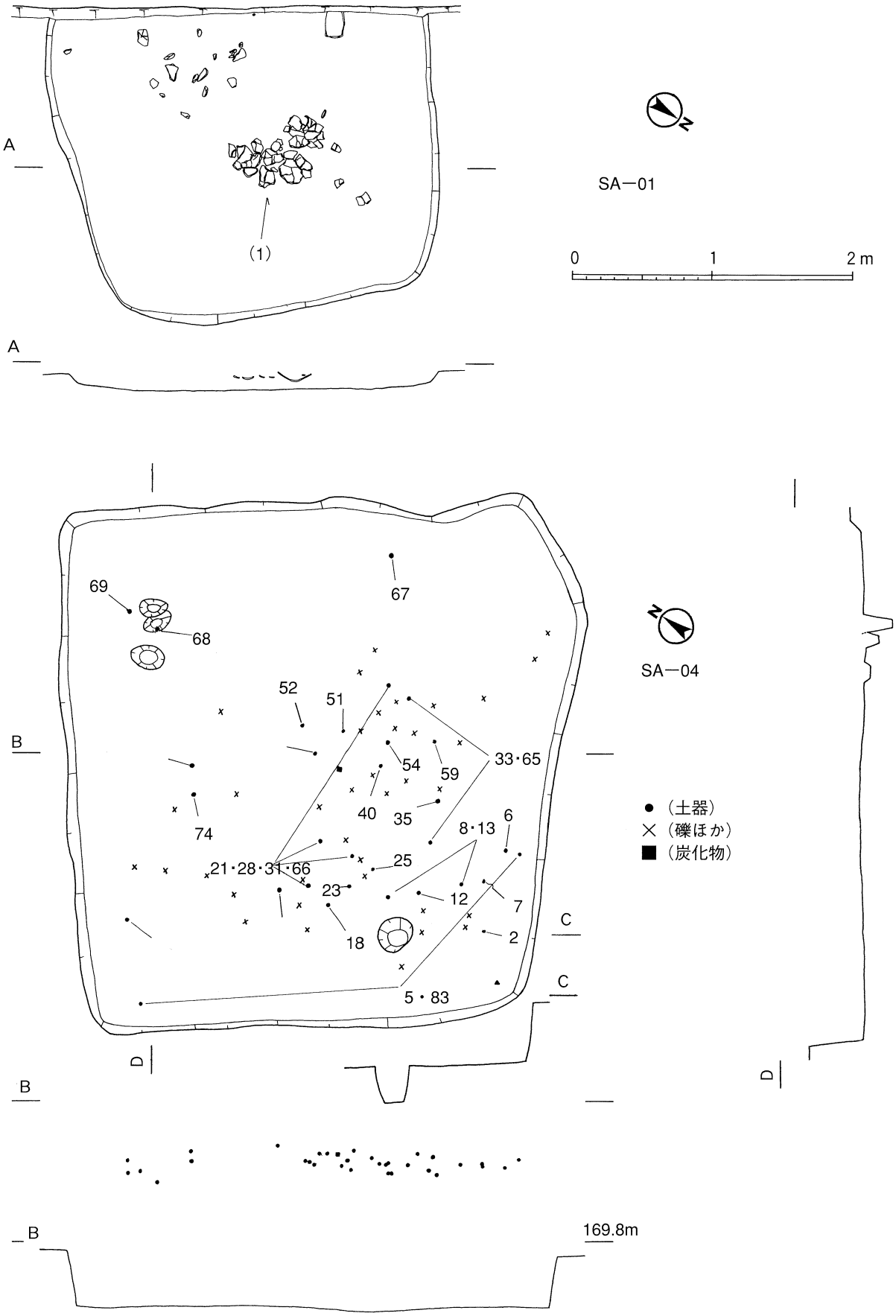
SA－10から南東へ約７mの地点で検出した。検出面からの深さは約28cm、―×636cmで南西側がやや歪である。基本的に隅丸の崩れた方形であるが南東側は円形的なラインを呈する。主軸がW1°Sを向く。柱穴は検出できなかった。遺物は覆土内から壺形土器（37・39～42）と甕形土器（12・38・39・44）を含め小破片と磨製石斧（58）、礫、炭化材などが出土した。

【SA－12】

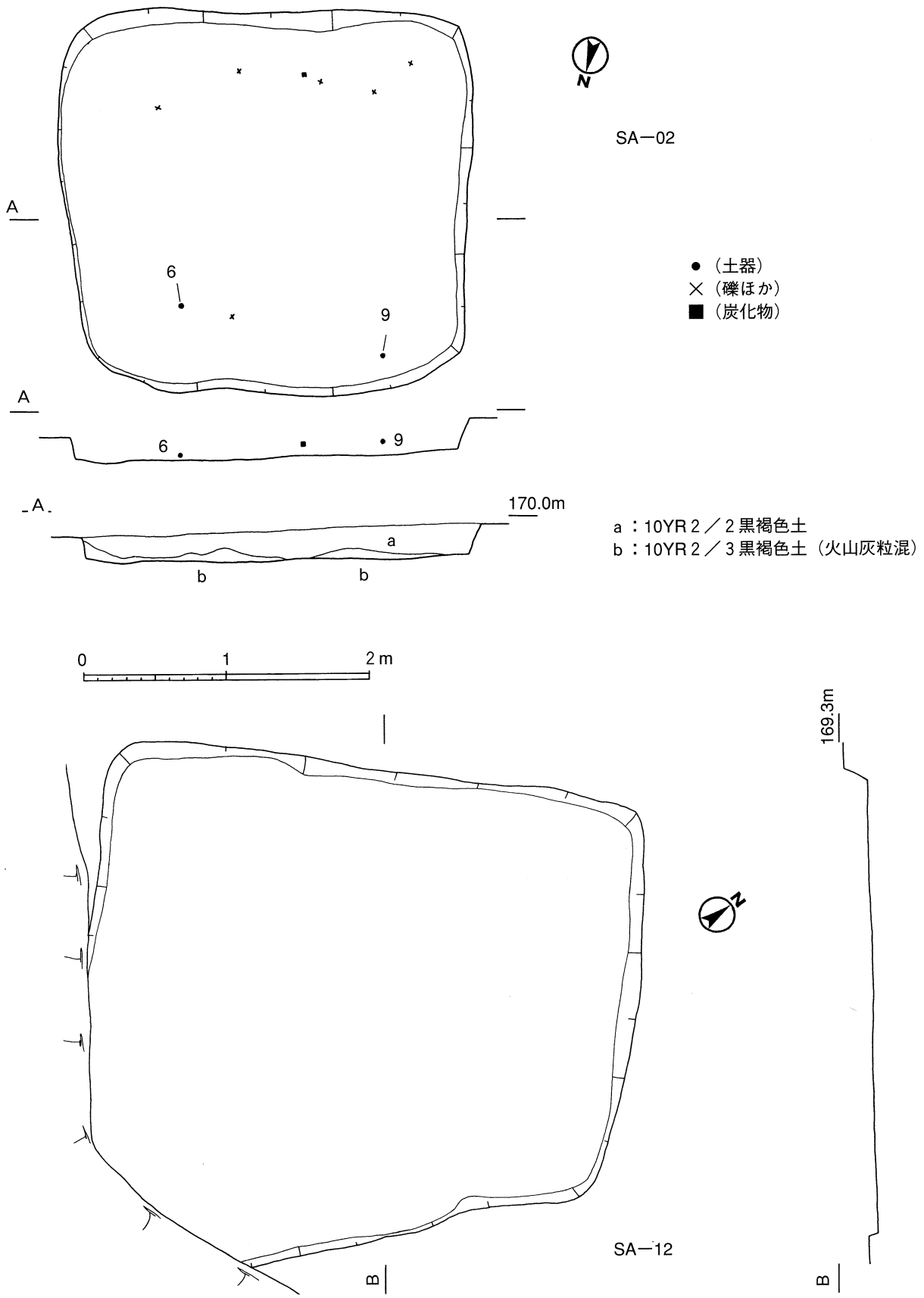
E区の南側で検出した。検出面からの深さは約17cmで、―×384cmの南西側へ開くやや歪な方形プランを呈し、南側の一部を攪乱によって切られている。主軸がN44°Eを向く。柱穴は検出できなかった。遺物は覆土内から土器の小破片と炭化した種実が出土したのみである。

【SA－13】

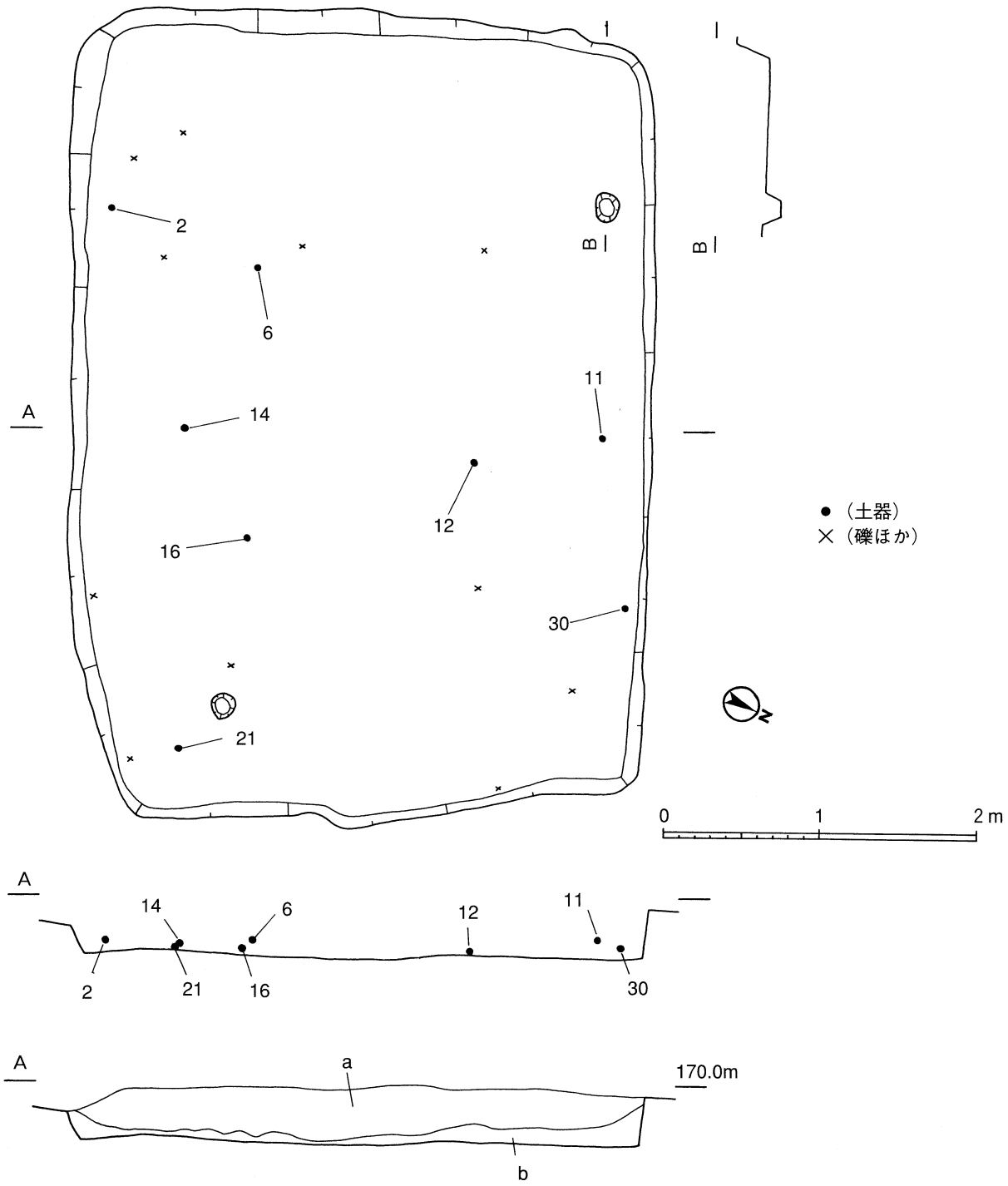
B区の最も東側で検出した。検出面からの深さは約24cmで、本遺跡の中では大形の部類に入る方形のものと見られるが、北側及び南東側を攪乱によって切られている。柱穴と見られるピットを２箇所検出した。遺物は覆土内からほぼ完形の鉢形土器（45・46）を含めた小破片と礫が出土した。



第４図　SA−01・04実測図（S＝１/40）

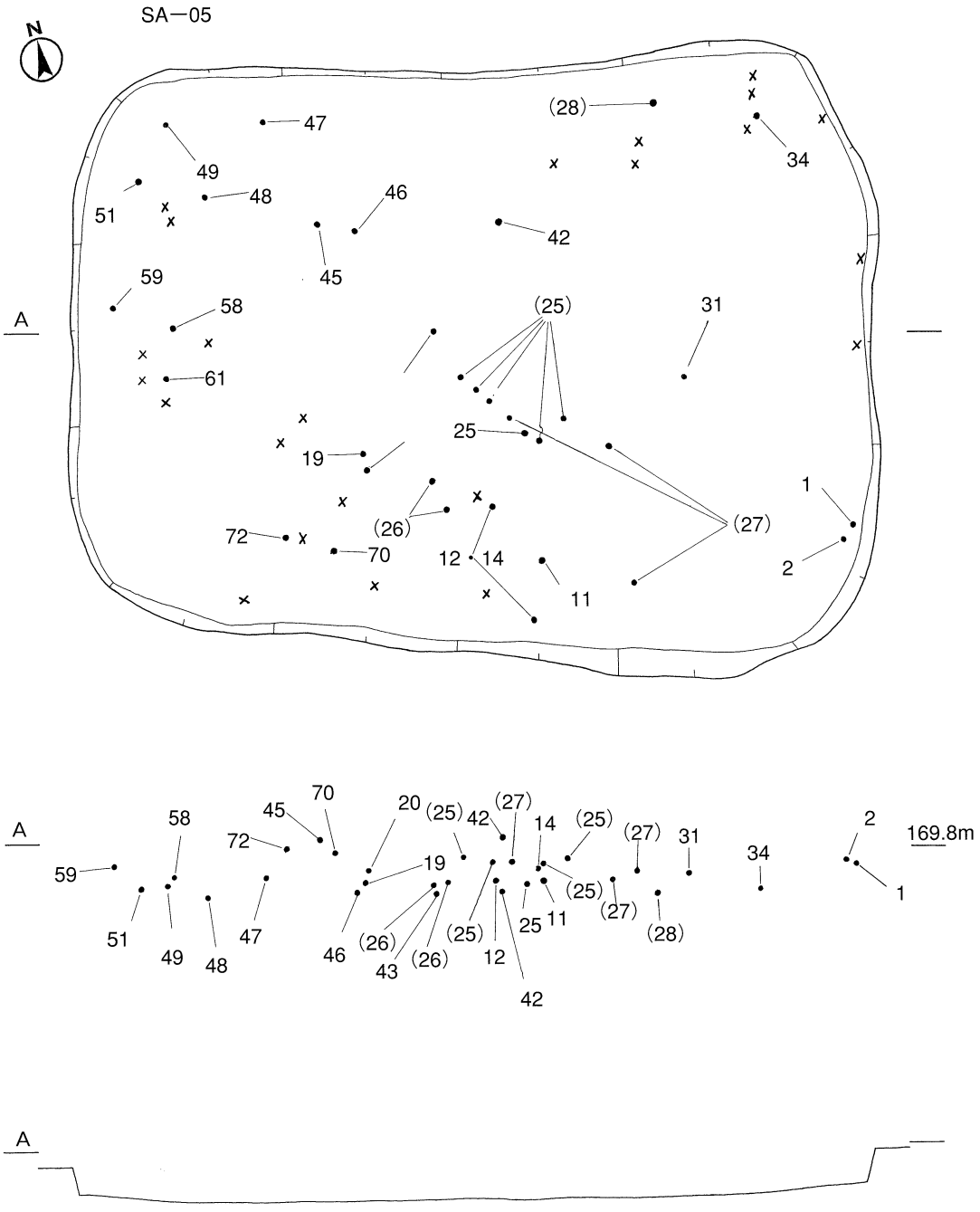


第 5 図　SA−02・12実測図（S＝1 /40）



a：10YR 2／2 黒褐
b：10YR 2／3 黒褐（火山灰粒少量含む）

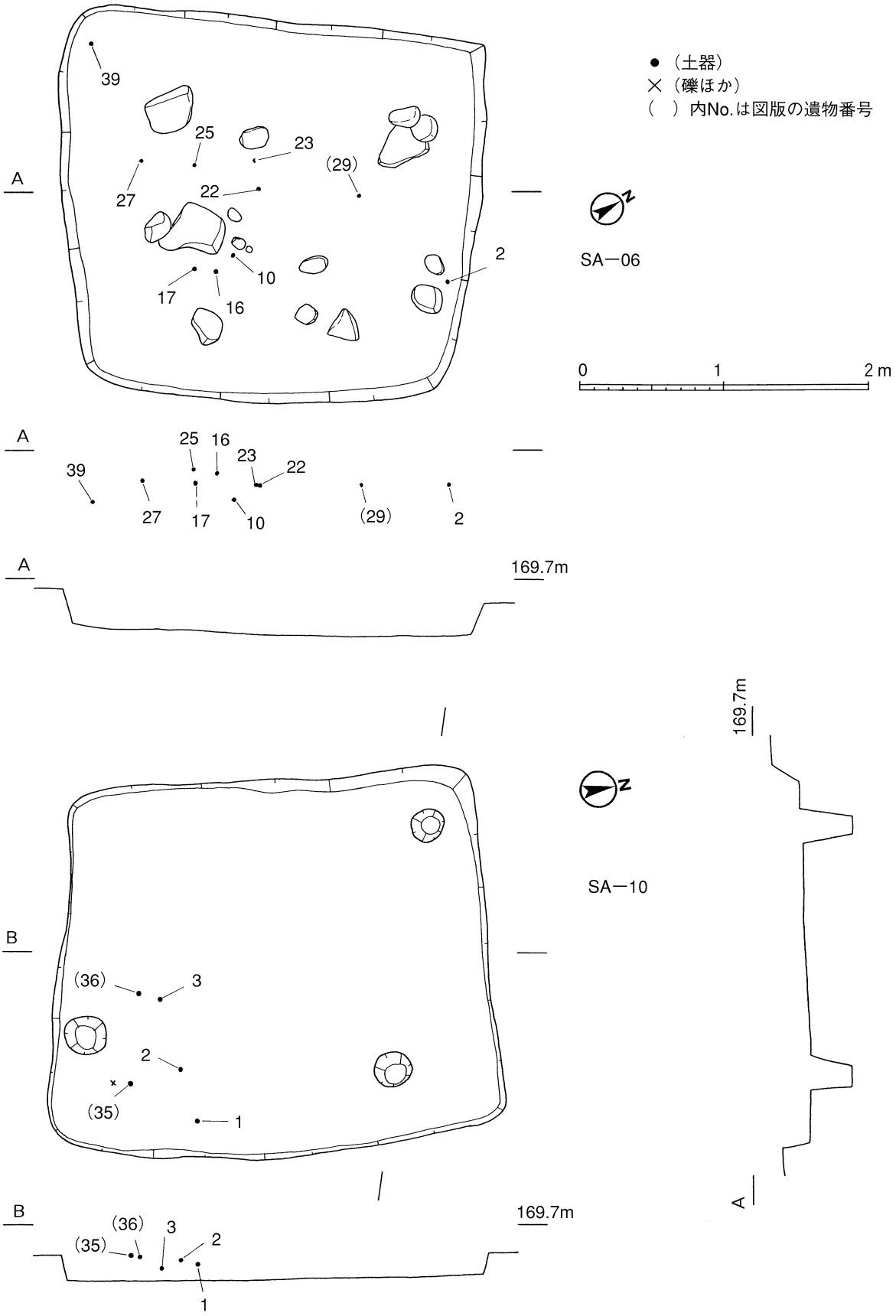
第 6 図　SA－03実測図（S＝1 /40）



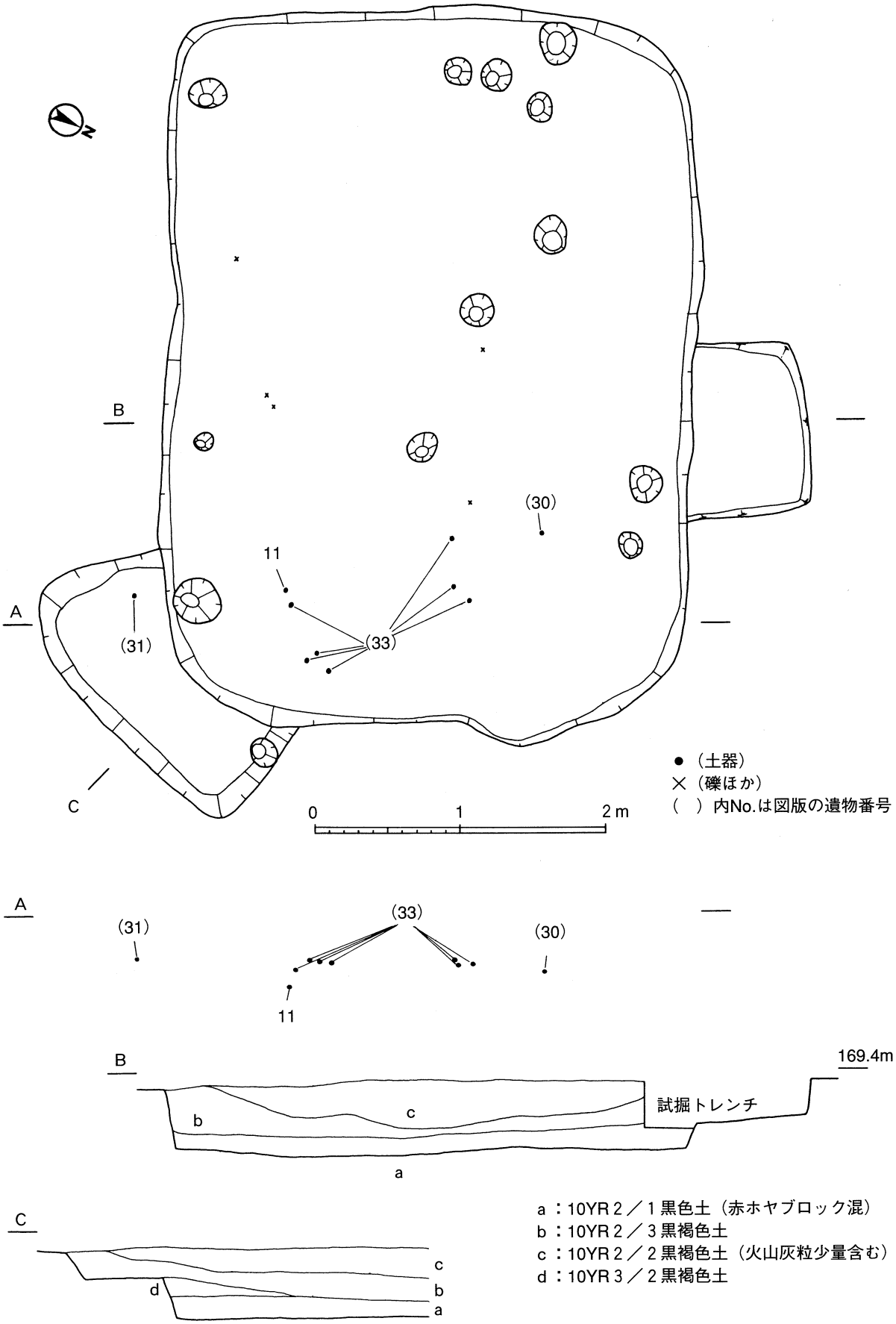
● （土器）
× （礫ほか）
（　）内No.は図版の遺物番号

0　1　2 m

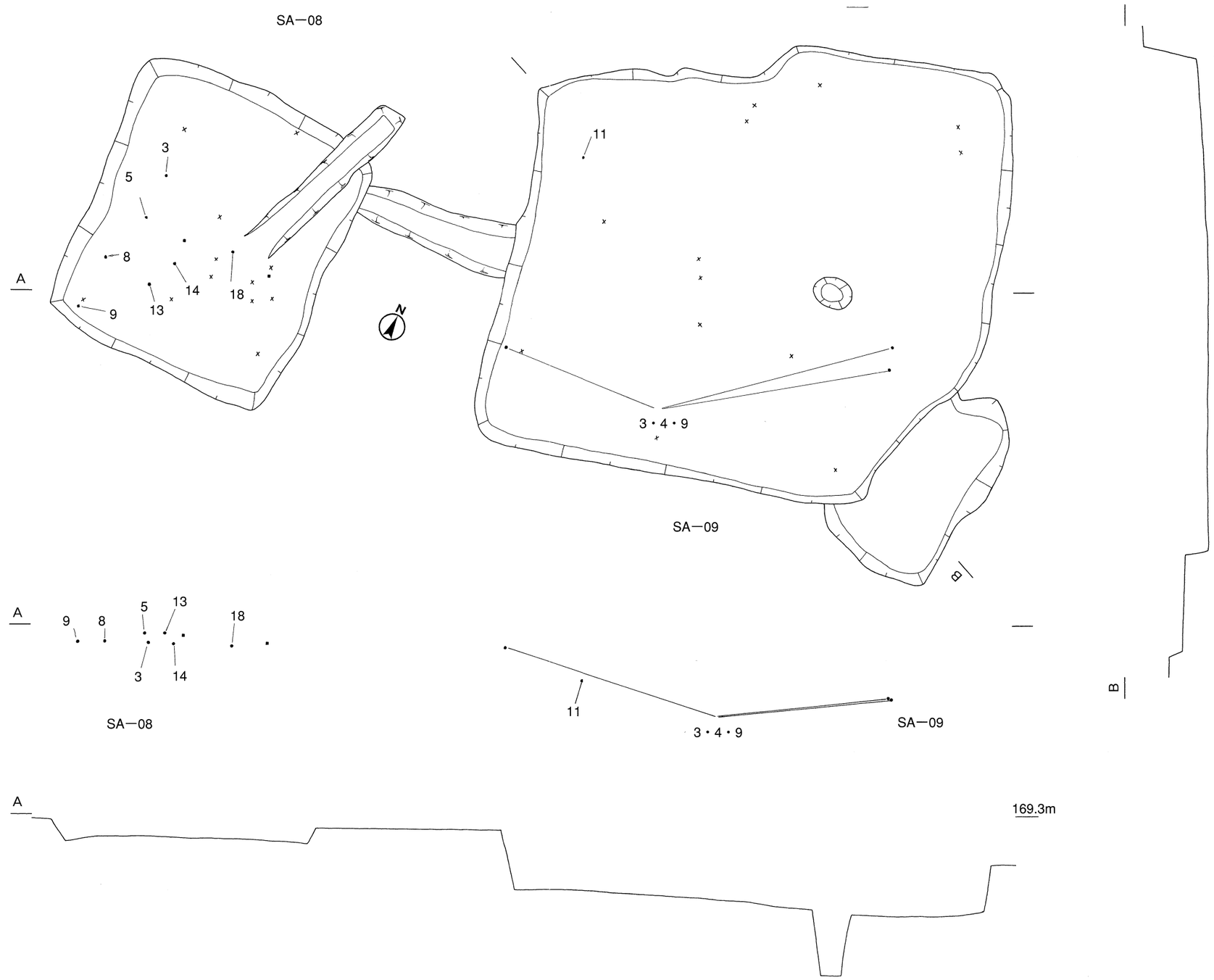
第７図　SA−05実測図（S＝１/40）



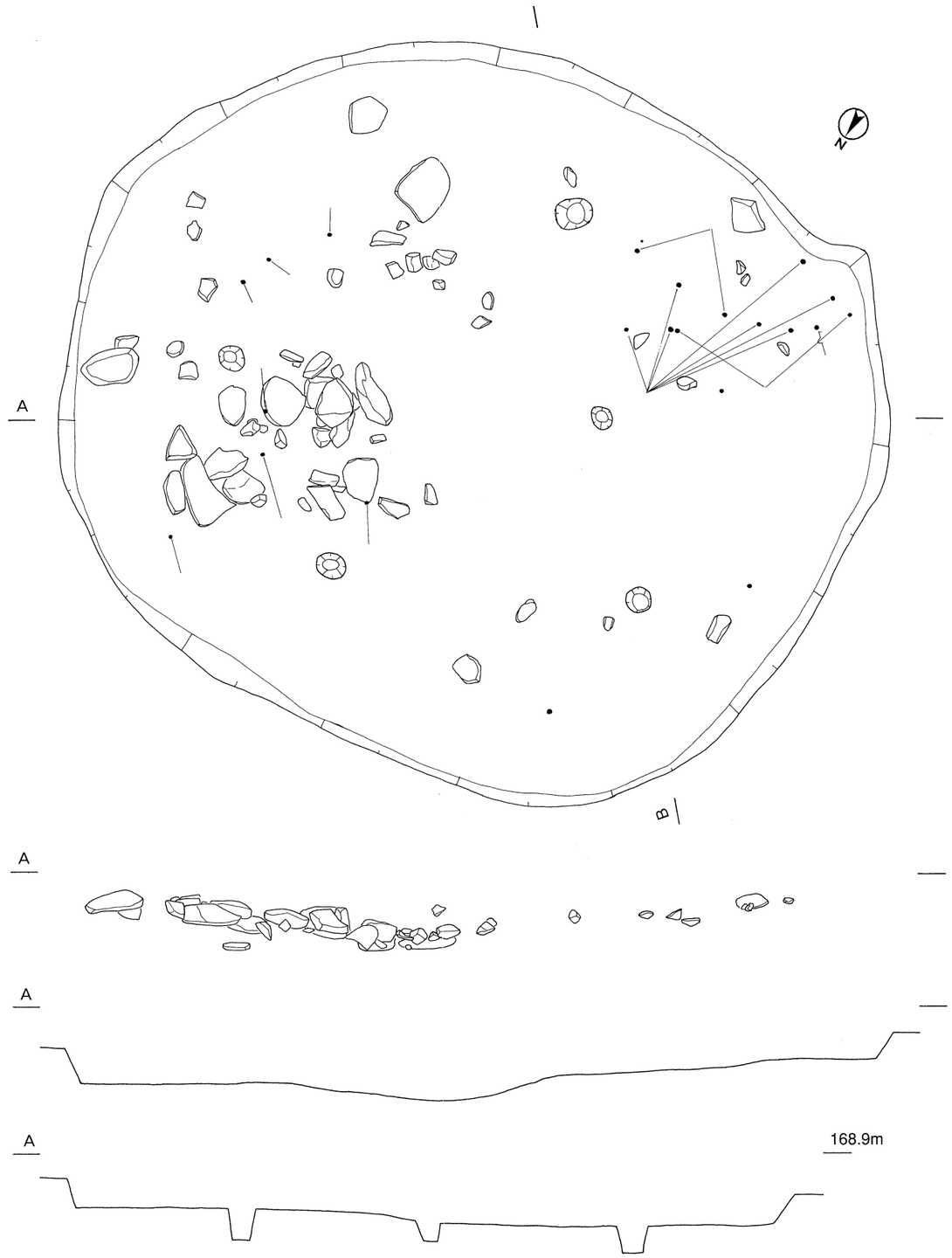
第８図　SA－06・10実測図（S＝１/40）



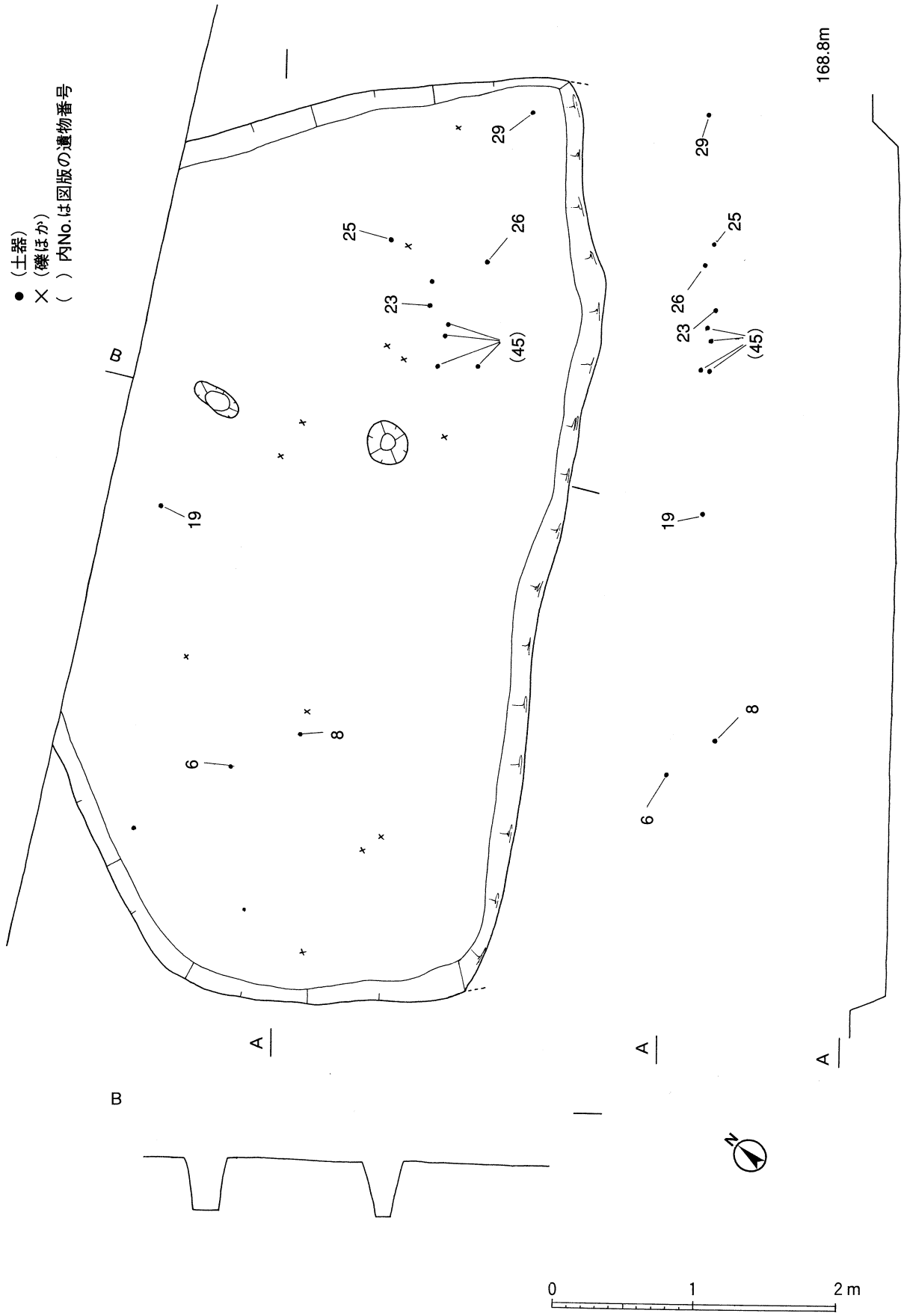
第 9 図　SA－07実測図（S＝1 /40）



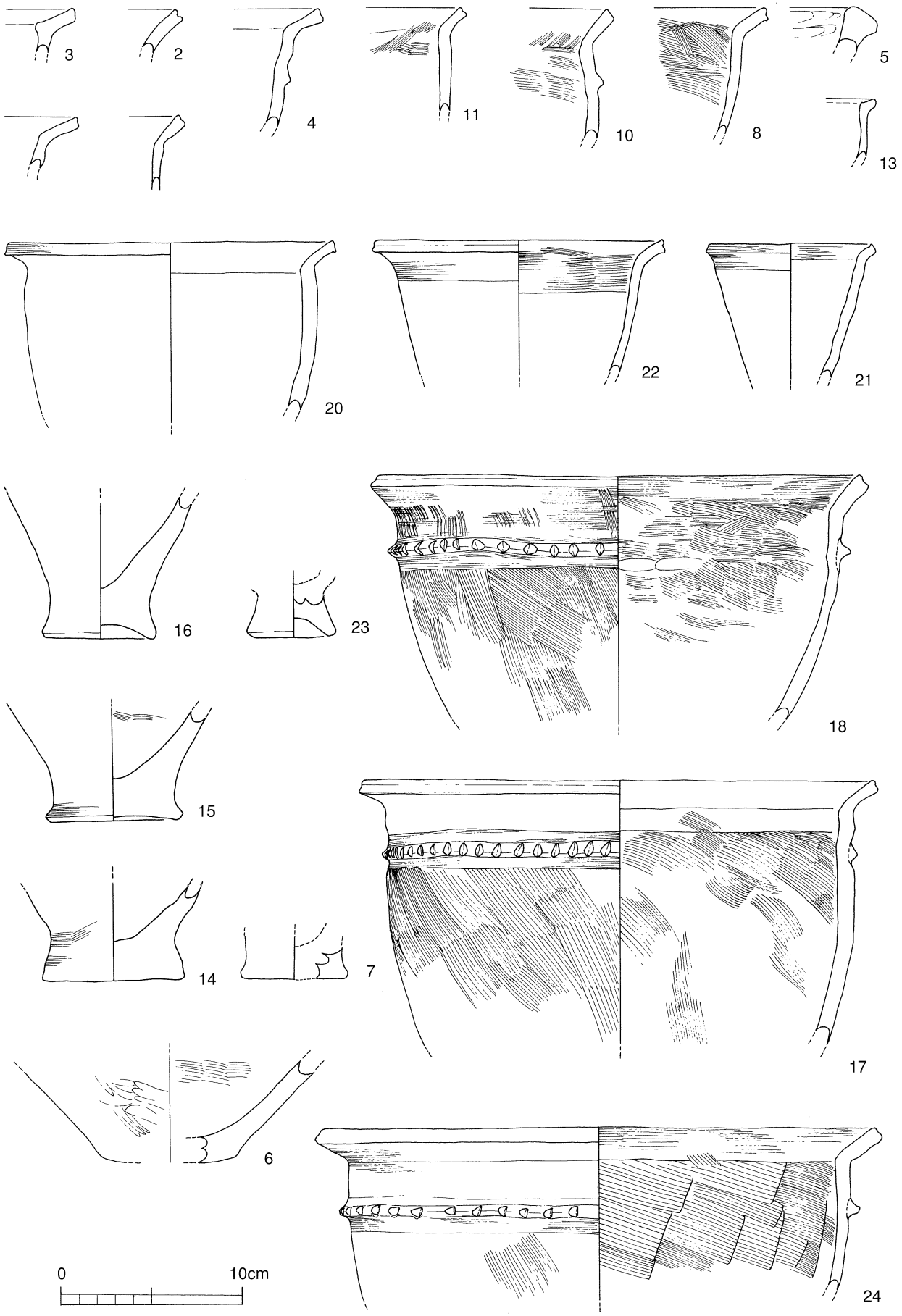
第10図　SA—08・09実測図（S＝1/40）



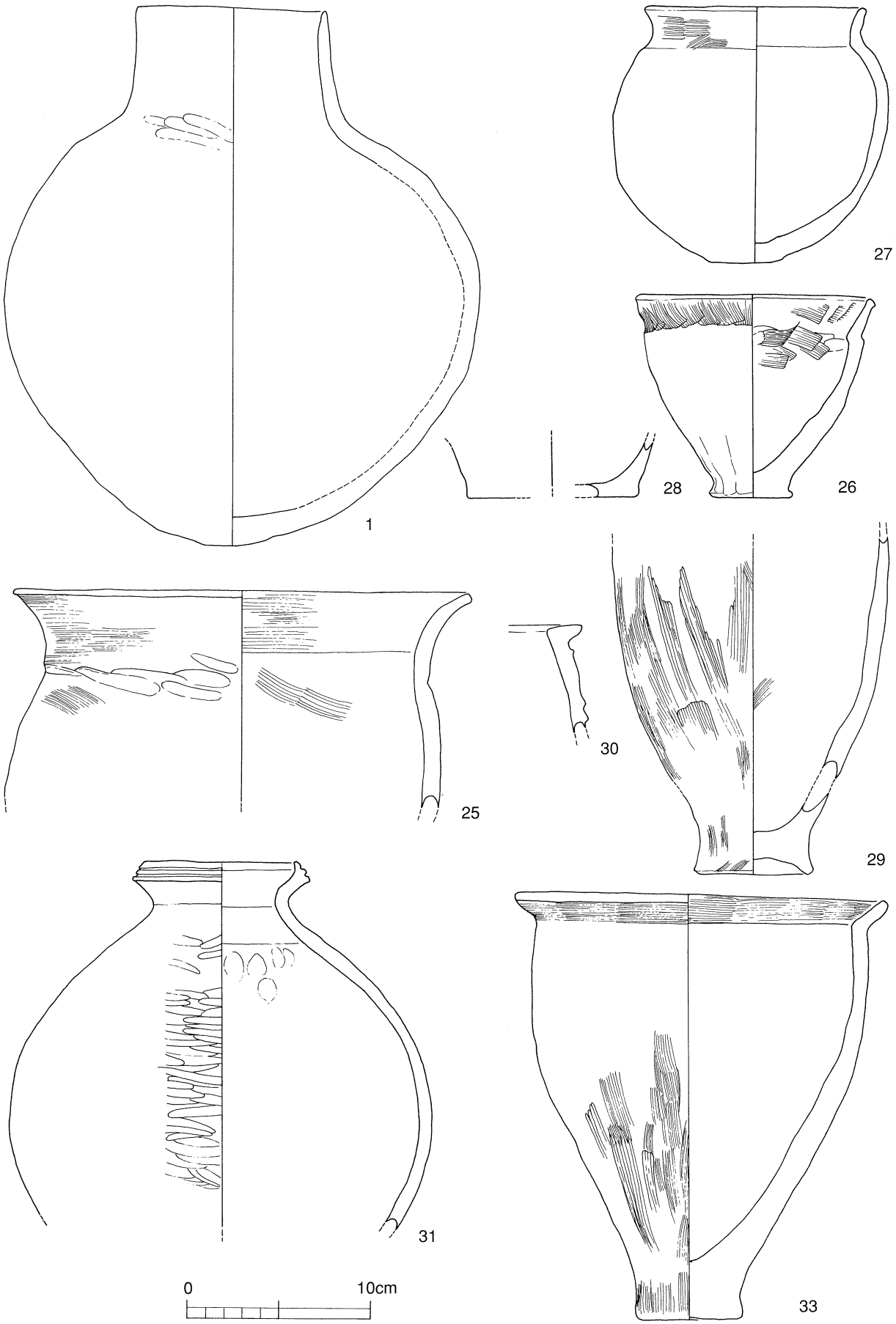
第11図　SA－11実測図（S＝1/40）



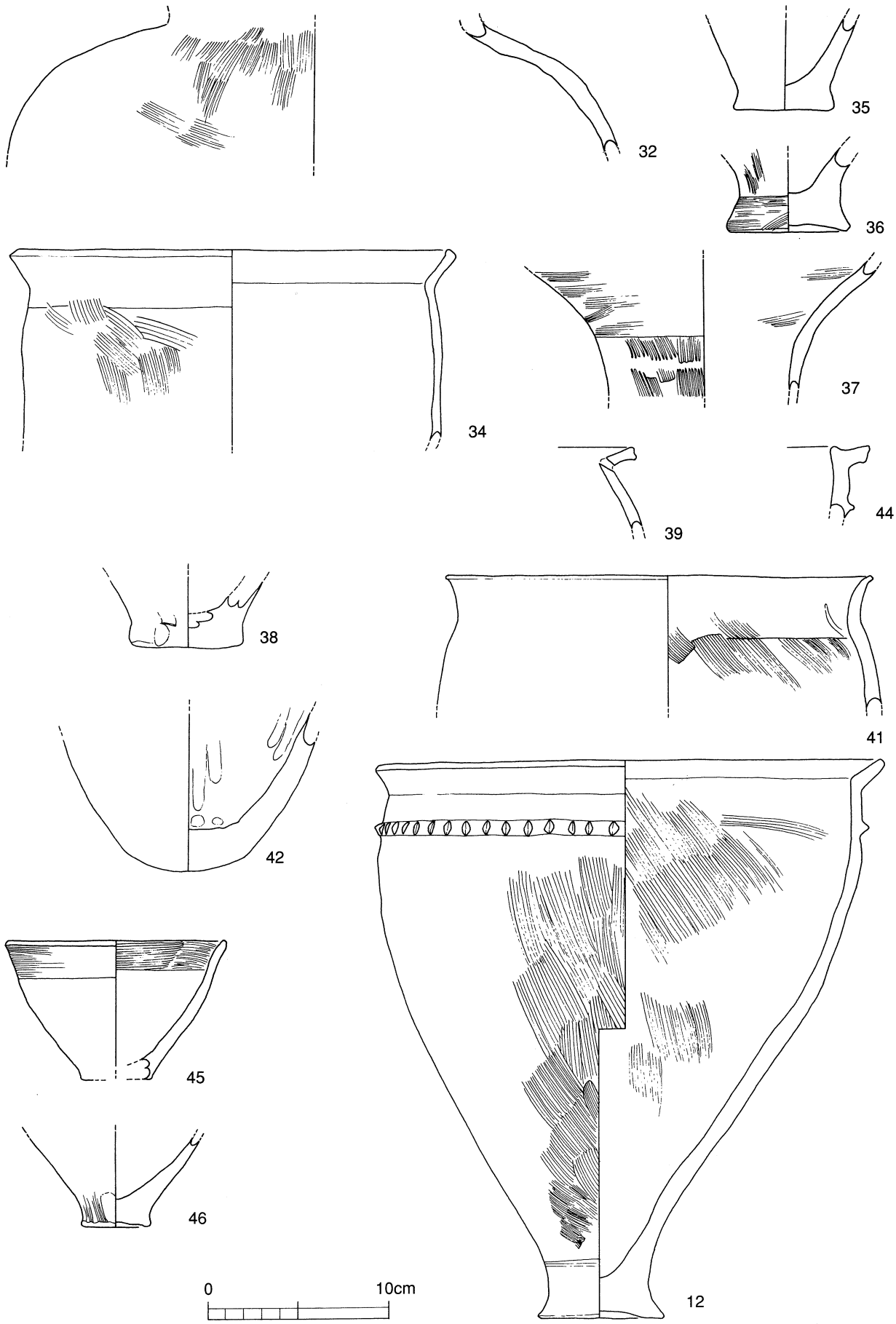
第12図　SA－13実測図（S＝1/40）



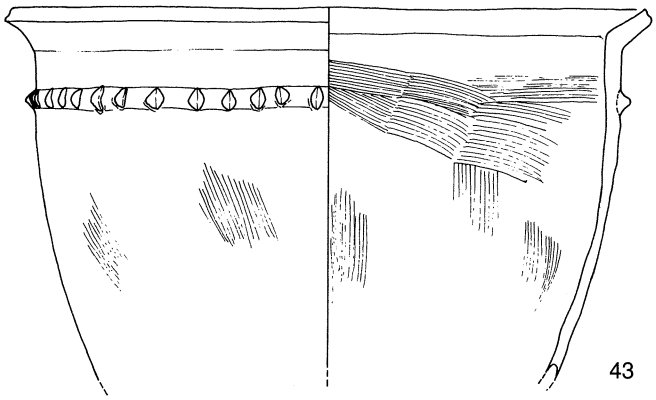
第13図　弥生時代の出土遺物（S＝1/3）

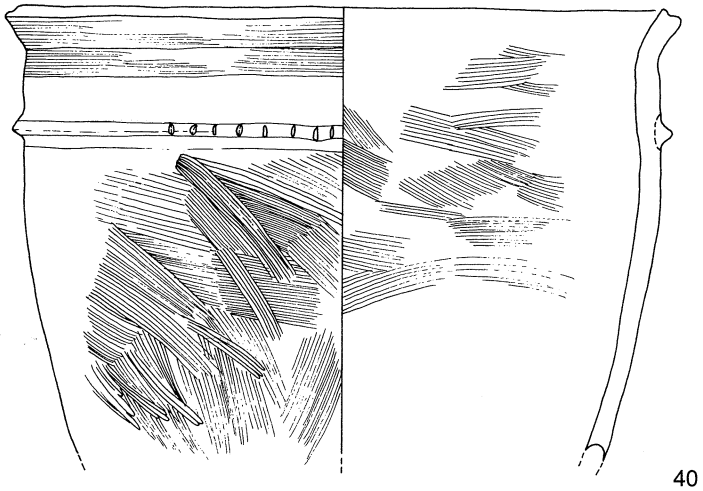


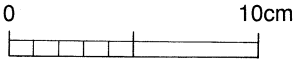
第14図　弥生時代の出土遺物（S＝1/3）



第15図　弥生時代の出土遺物（S＝1/3）



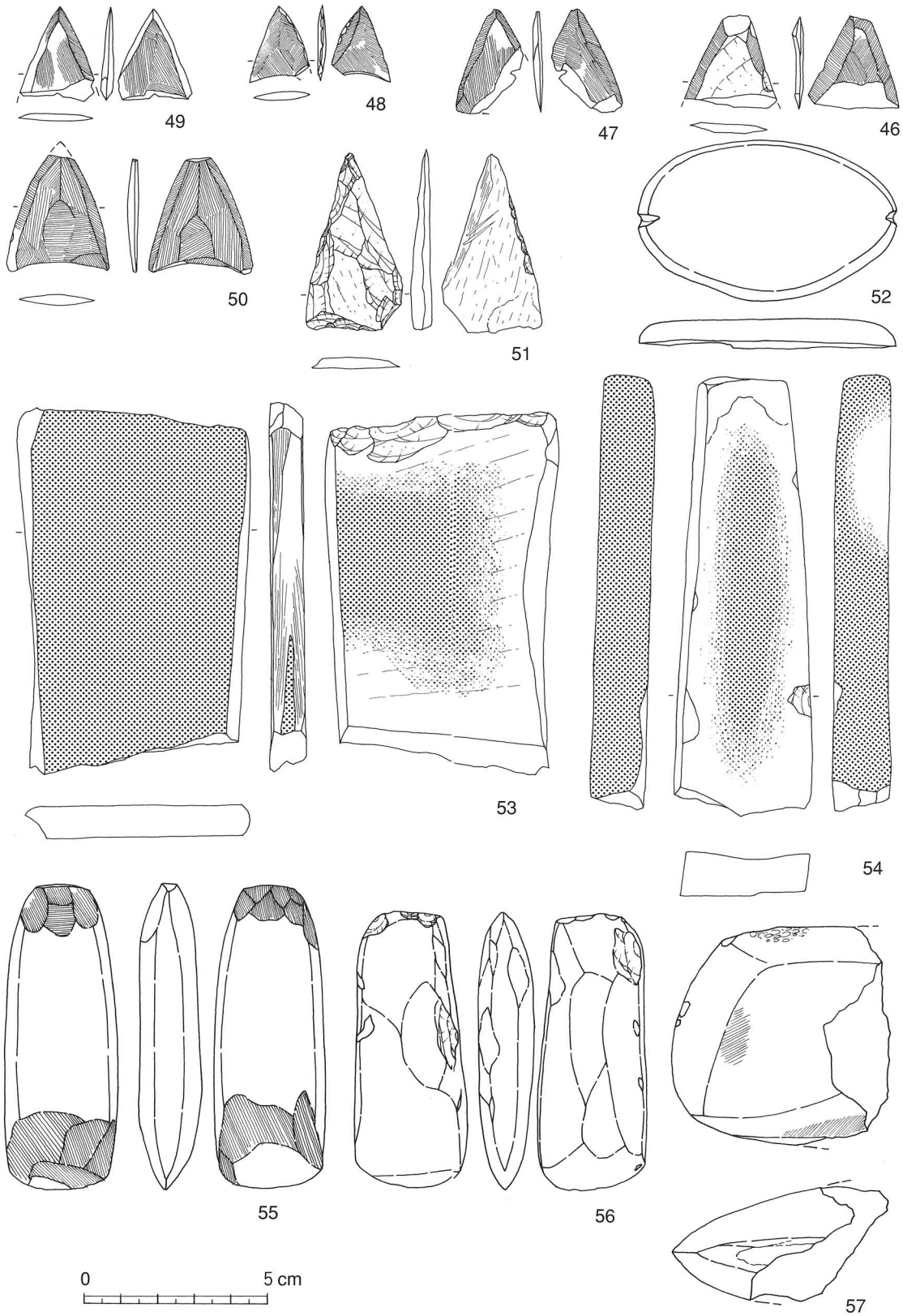




第16図　弥生時代の出土遺物（S＝1/3）

出土遺物観察表

番号	出土地点	器種	部位	口(底)径	文様	外面調整	内面調整	胎　土	焼成	色調	備考
1	SA−01	壺	口縁〜底部	10.3cm		ナデ〜押え	ナデ	粗（2〜3mm褐色砂粒多量）	やや不良	浅黄橙色（7.5YR8/3）	摩滅顕著
2	包含層	甕	口縁端部			ナデ	ナデ	良	良	淡黄色（2.5Y8/4）	煤付着
3	包含層	甕	口縁端部			ナデ	ナデ	やや粗（0.1〜0.2mm角閃石、雲母片）	良	にぶい黄橙色（10YR7/4）	
4	SA−04	甕	口縁部		刻み目突帯	ナデ	ナデ〜ハケ	粗（0.1〜0.5mm長石、角閃石）		にぶい黄橙色（7.5YR6/4）	煤付着
5	SA−04	甕	口縁端部			ケズリ	ケズリ	良（0.5mmの長石、褐色粒）	良	橙色（5YR10/6）	
6	SA−04	壺	底部	(7.5cm)		ミガキ〜ナデ	ハケ〜ナデ	やや粗（0.2〜0.5mmの長石、白色粒、角閃石）	良	明黄褐色（10YR6/6）	煤付着
7	SA−04	甕	底部	(7.0cm)		ナデ	ナデ	良	良	浅黄橙色（7.5YR8/6）	煤付着
8	SA−04	甕	口縁部			ナデ〜ハケ	ナデ〜ハケ	良（0.1〜0.2mm角閃石）	良	浅黄色（2.5YR7/3）	煤付着
9	SA−04	甕	口縁部			ナデ	ナデ	粗（0.5mm長石、黒色・褐色砂粒）	良	淡黄色（2.5Y8/4）	煤付着
10	SA−04	甕	口縁部		刻み目突帯	ナデ	ナデ〜ハケ	良（0.5mm長石、2mm褐色粒、雲母片）	良	淡黄色（2.5Y8/4）	
11	SA−04	甕	口縁部			ナデ	ナデ〜ハケ	良（0.1〜0.2mm長石、白色砂粒）	良	明黄褐色（10YR7/6）	
12	SA−11	甕	口縁〜底部	27.8cm	刻み目突帯	ナデ〜ハケ	ナデ〜ハケ	良（0.5mm角閃石、黒色粒）	良	にぶい黄橙色（10YR7/4）	煤付着
13	SA−04	甕	口縁端部			ナデ	ナデ	やや粗（1mm砂粒）	良	灰黄色（2.5Y7/2）	
14	SA−04	甕	底部	7.9cm		ハケ	ナデ	粗（1〜2mm白色砂粒、長石多量）	不良	にぶい黄色（2.5Y6/3）	
15	SA−04	甕	底部	7.6cm		ハケ	ナデ（ハケ）	やや粗（0.5〜2mm長石、白色砂粒、雲母片）	良	橙色（7.5YR6/6）	
16	SA−04	甕	底部	6.4cm				やや粗（0.5〜2mm長石、白色砂粒）	良	明黄褐色（2.5Y7/6）	
17	SA−04	甕	口縁〜胴部	28.1cm	刻み目突帯	ナデ〜ハケ	ハケ	粗（0.1〜2mm角閃石、褐色粒）	良	淡黄色（2.5Y8/3）	
18	SA−04	甕	口縁〜胴部	26.6cm	刻み目突帯	ハケ	ハケ	良（0.1〜0.2mm長石、赤色粒）	良	にぶい黄橙色（10YR7/4）	煤付着
19	SA−04	甕	口縁部			ハケ	ハケ	良（0.1〜0.2mm角閃石）	良	にぶい黄橙色（10YR6/3）	
20	SA−04	甕	口縁〜体部	17.8cm		ナデ	ナデ	粗（0.5mm長石、白色・褐色砂粒）	良	にぶい黄橙色（10YR6/4）	煤付着
21	SA−04	甕	口縁〜体部	9.0cm		ハケ〜ナデ	ナデ	良	良	浅黄橙色（10YR8/4）	
22	SA−04	甕	口縁〜体部	16.0cm		ハケ〜ナデ	ハケ〜ナデ	良（0.1〜0.2mm長石、黒色砂粒）	良	明黄褐色（10YR7/6）	煤付着
23	SA−04	甕	底部	(4.9cm)				良（0.1〜0.3mm角閃石）	良	橙色（5YR6/6）	
24	SA−04	甕	口縁部	30.5cm	刻み目突帯	ハケ	ハケ	良（0.1〜0.2mm長石、角閃石、白色砂粒、雲母片）	良	淡黄色（2.5Y8/4）	煤付着
25	SA−05	甕	口縁〜体部	24.8cm		ハケ	ハケ	粗（1〜3mm砂粒多量）	良	淡黄色（2.5Y8/4）	煤付着
26	SA−05	鉢	口縁〜底部	12.8cm		ハケ〜ナデ	ハケ	良（4mm砂粒少量）	良	黄橙色（7.5YR7/8）	
27	SA−05	壺	口縁〜底部	11.8cm		ハケ〜ナデ	ナデ	粗（1〜3mm黒色・白色砂粒）	良	浅黄橙色（10YR8/3）	
28	SA−05	壺	底部	(9.4cm)				良・密	良	橙色（7.5YR6/6）	
29	SA−06	甕	体部〜底部	(7cm)		ハケ	ハケ〜ナデ	粗（1〜3mm砂粒多く含む）	やや不良	明黄褐色（10YR7/6）	
30	SA−07	甕	口縁部			ナデ	ナデ	良（0.5〜1mmの長石、黒色砂粒含む）		にぶい黄橙色（10YR7/4）	
31	SA−07	壺	口縁〜胴部	8.2cm	凹線	ナデ〜ミガキ	ナデ〜押え	良（0.1〜0.2mm長石含む）	良	淡黄色（2.5Y8/3）	煤付着
32	SA−07	壺	体部					粗（1〜3mm灰色砂粒多量）	やや不良	淡黄橙色（7.5YR8/6）	
33	SA−07	甕	口縁〜底部	20.0cm		ハケ〜ナデ	ハケ〜ナデ	良（0.1〜0.2mm白色・黒色粒、雲母片）	良	淡橙色（5YR8/6）	黒斑
34	SA−08	甕	口縁〜体部	24cm		ナデ〜ハケ	ナデ	良（0.1〜0.2mm黒色粒、雲母片）	良	にぶい黄橙色（10YR7/4）	煤付着
35	SA−10	甕	底部	(5.6cm)		ナデ	ナデ	やや粗（0.5mm長石、白色粒）	やや不良	にぶい褐色（7.5YR5/4）	煤付着
36	SA−10	甕	底部	(6.8cm)		ハケ	ナデ	良（雲母片）	良	にぶい黄橙色（10YR7/4）	煤付着
37	SA−10	壺	頸部			ハケ（工具痕）	ハケ〜ナデ	良（1mm黒色、赤色砂粒）	良	にぶい黄橙色（10YR6/3）	
38	SA−11	甕	底部	(6.3cm)	刻み目突帯	ナデ（工具痕）	ナデ	やや粗（0.5mmの長石、黒色砂粒）		鈍い黄橙色（10YR7/4）	
39	SA−11	甕	口縁部			ナデ	ナデ〜ハケ	粗（1mm長石、黒色・褐色砂粒）	良	橙色（7.5YR7/6）	頸部に穿孔
40	SA−11	甕	口縁〜胴部	25.8cm		ナデ〜ハケ	ナデ〜ハケ	良（0.1〜0.2mm赤褐色粒）	良	にぶい黄橙色（10YR7/4）	煤付着
41	SA−11	甕	口縁部	23.3cm	刻み目突帯	ナデ	ナデ〜ハケ	やや粗（2mm砂粒）	良	浅黄橙色（10YR8/3）	煤付着
42	SA−11	壺	底部	(3.5cm)		ナデ	押え	粗（1〜2mm長石、黒色砂粒多量）	良	浅黄橙色（10YR8/3）	
43	SA−11	甕	口縁〜体部	20.8cm		ナデ〜ハケ	ナデ〜ハケ	やや粗（0.5mm黒色・褐色粒）	良	にぶい黄橙色（10YR7/3）	煤付着
44	SA−11	甕	口縁部		刻み目突帯	ナデ	ナデ	やや粗（0.1〜0.2mm長石、0.5mm黒色粒）	良	にぶい黄橙色（10YR7/4）	
45	SA−13	鉢	口縁〜底部	12.0cm		ハケ〜ナデ	ハケ〜不明	粗（0.5mm赤色粒、1〜2mm白色砂粒）	良	明黄褐色（10YR7/6）	
46	SA−13	鉢	底部	(3.9cm)		ナデ〜ハケ	不明	良（0.5mm長石、赤色・黒色砂粒）	良	明黄褐色（10YR7/6）	



第17図　出土遺物実測図（S＝2/3）

第３節　本野遺跡の自然化学分析調査

１．樹種同定

〈１〉試料

試料は、SA－03から出土した２点、およびSA－08から出土した１点の計３点である。これらの住居跡はいずれも弥生時代中期のものとされている。

〈２〉方法

割折またはカミソリを用いて基本的な３断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）をつくり、落射顕微鏡によって50～600倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生樹木の木材標本との対比で行った。

〈３〉結果

以下に結果を示し記載を行う。

試　　料	樹種（和名／学名）
SA－03　炭化材①	ツブラジイ
	Castanopsis cuspidata（Thunb. ex Murray）Schottky
SA－03　炭化材②	シイ属　*Castanopsis*
SA－08　炭化材	ツバキ　*Cleyerajaponica*　Thunb.　ツバキ科

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* (Thunb. ex Murray) Schottky　ブナ科

横断面：中型の道管がやや放射状に配列し、晩材部では小型の道管が火炎状に配列する環孔材である。

放射断面：道管は単穿孔である。放射組織は平伏細胞のみから構成される。

接線断面：放射組織は同性で単列のものと広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質からツブラジイと同定される。ツブラジイは関東地方以南の照葉樹林帯下部に分布する主要な常緑高木で、高さ20m、径１mに達する。内陸部に多い。薪炭材、建築、器具、家具に利用される。

シイ属　*Castanopsis*　ブナ科

横断面：中型の道管がやや放射状に配列し、晩材部では小型の道管が火炎状に配列する環孔材である。

放射断面：道管は単穿孔である。放射組織は平伏細胞のみから構成される。

接線断面：放射組織は単列同性である。

以上の形質からシイ属と同定される。シイ属にはツブラジイとスダジイがあり、ツブラジイは複合放射組織でありスダジイは単列同性である。ツブラジイの広放射組織はあまり多く存在しないのでここではシイ属とした。シイ属は関東地方以南の照葉樹林帯下部に分布する主要な常緑高木で、高さ20m、径１mに達する。スダジイは海岸部に多く、ツブラジイは内陸部に多い。薪炭材、建築、器具、家具に利用される。

サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科

横断面：小さな径の道管が散在する散孔材である。道管の径はほとんど変化しない。

放射断面：道管は細かく多い階段状の多孔穿孔である。道管または木繊維にやや不鮮明ながら螺旋肥厚が認められる。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性放射組織である。

接線断面：放射組織は単列異性である。

以上の形質からサカキに同定される。サカキは西南日本から大陸にかけて分布する常緑小高木で、高さ12m、径30＝に達する。材は強靭・堅硬で建築・器具類などに用いられる。

２．種実同定

〈１〉試料

試料はSA－12の内部から出土したものである。

〈２〉方法

種実は炭化したものであり、肉眼および実体顕微鏡で観察を行った。同定は現生標本との対比で行った。

〈３〉結果

以下に結果を示し記載を行う。なお、破片は細片は計数からのぞいた。

分類群（和名／学名）	部　位	完　形	破　片
イチイガシ　*Quercus gilva* Blume	種子（子葉）	48	138

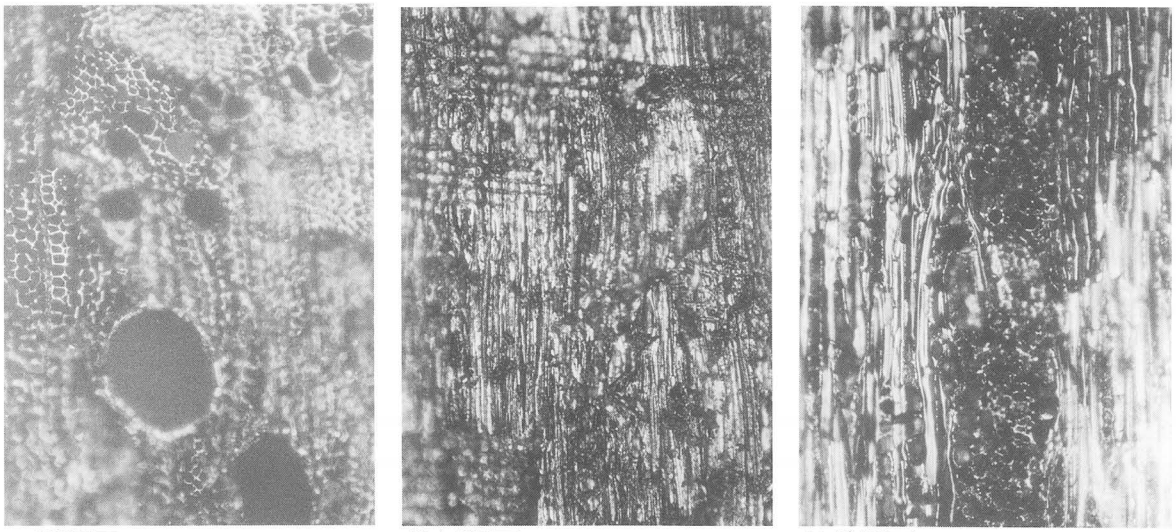
イチイガシ　*Quercus gilva* Blume　種子（子葉）ブナ科

堅果の内部の種子の炭化したもので、炭化した子葉にあたる。一条の凹線が入りしわがあまり入らず比較的平滑な表面をもちやや四角い形を呈する。

以上の形質から、イチイガシの種子（子葉）と同定される。破片については、完形のものがすべてイチイガシの種子であるため、イチイガシに含んだ。

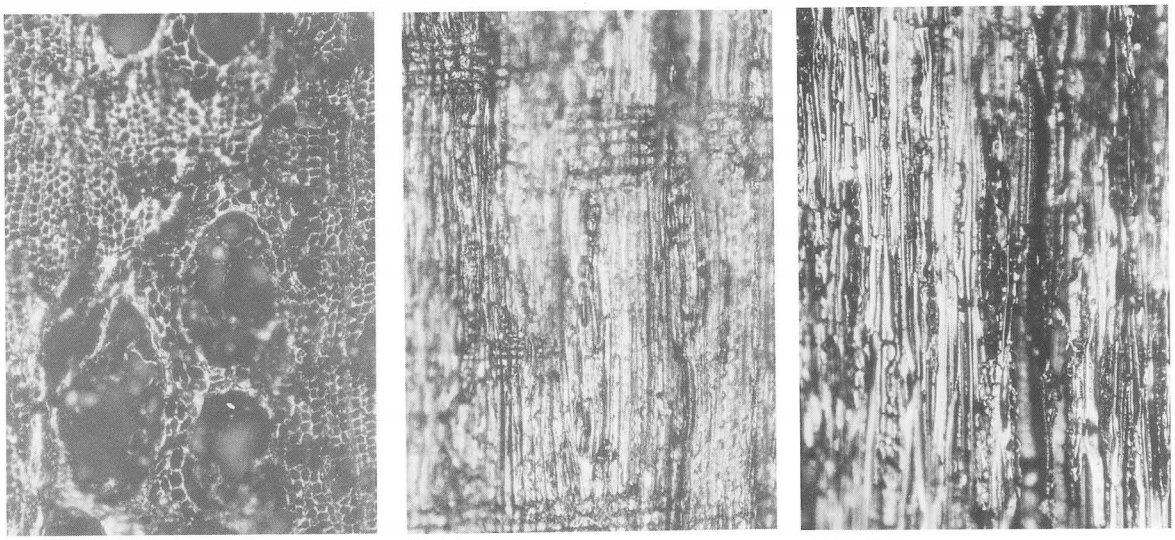
イチイガシは本州南部・四国・九州の照葉樹林を構成する主要高木の一つである。堅果はコナラ属のなかで唯一渋抜きなしでそのまま食用となるものである。

田野町、本野遺跡の樹種同定



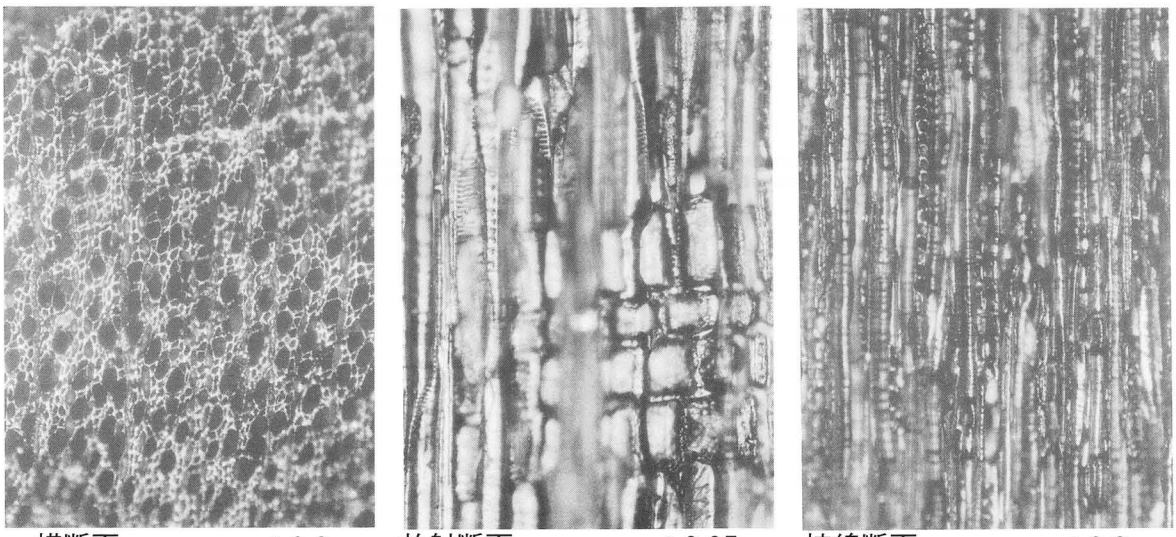
横断面 ———：0.2mm　放射断面 ———：0.2mm　接線断面 ———：0.2mm

1　SA－03　炭化材①　ツブラジイ



横断面 ———：0.2mm　放射断面 ———：0.2mm　接線断面 ———：0.2mm

2　SA－03　炭化材②　シイ属



横断面 ———：0.2mm　放射断面 ———：0.05mm　接線断面 ———：0.2mm

3　SA－08　炭化材　サカキ

田野町、本野遺跡の種実同定Ⅰ

1　イチイガシ　種子（子葉）

2　イチイガシ　種子（子葉）

3　イチイガシ　種子（子葉）

4　イチイガシ　種子（子葉）

5　イチイガシ　種子（子葉）

6　イチイガシ　種子（子葉）

7　イチイガシ　種子（子葉）

8　イチイガシ　種子（子葉）

9　イチイガシ　種子（子葉）

1 cm

田野町、本野遺跡の種実同定Ⅱ

10　イチイガシ　種子（子葉）

11　イチイガシ　種子（子葉）

12　イチイガシ　種子（子葉）

13　イチイガシ　種子（子葉）

14　イチイガシ　種子（子葉）

15　イチイガシ　種子（子葉）

16　イチイガシ　種子（子葉）

17　イチイガシ　種子（子葉）

18　イチイガシ　種子（子葉）

1 cm

第4節　まとめ

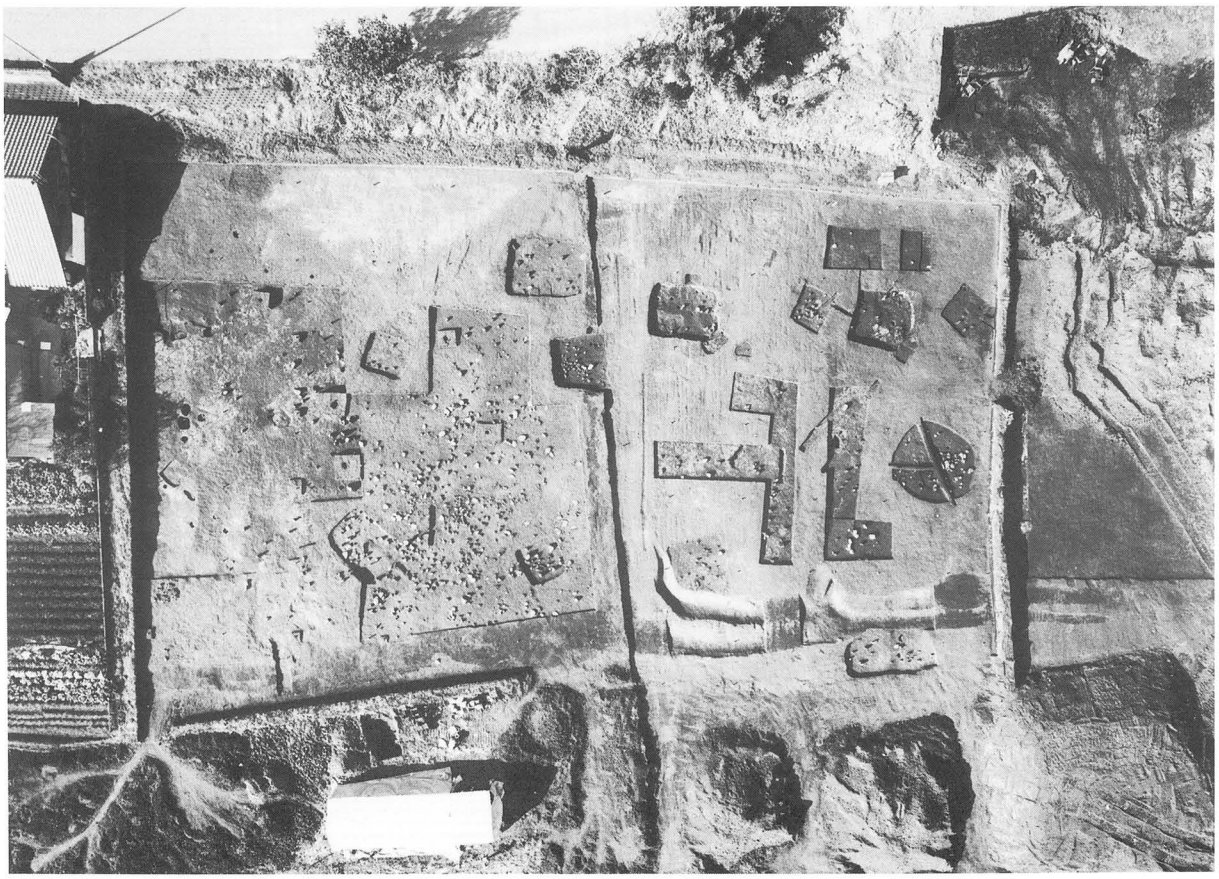
以上に本野遺跡における弥生時代の調査結果として、主に竪穴式住居を中心に事実報告をおこなった。以下に、これらの概略をまとめることで本報告書の役目を終えたい。

弥生時代の竪穴式住居はＦ区の西端で検出したSA－01を除いて、同区の中心から東方のＦ区にかけて拡がりを見せる。さらにこの北側及び東側に位置するＡ～Ｄ区においては、耕作による削平の影響も考えられるが、同遺構は皆無であった。Ａ～Ｃ区においては黒色土内から少量の弥生土器片が出土したが、この斜面を隔てて位置する高野原遺跡からの流れ込みによるものと解釈した。したがって、比較的小規模な集落であったものと想定される。各住居のプランは方形（SA－01・４・６・８・10）と明らかな長方形（SA－03・05・07・09・12）と隅丸に近い不正形なもの（SA－11）とに分類しうる。これらの中で住居の隅に突出部を有するSA－07と09は、日向型間仕切り住居との関連を検証する必要があるものとして、次年度に編集予定の「平成６年度高野原遺跡」において取り上げたい。また、各遺構が営まれた時間差については、主軸の方位から２ないし３段階が想定されるが、現時点ではその前後関係を含め詳細を述べるのは差し控え、中期末から後期にかけての範疇にあるものとしておきたい。

古環境研究所に委託した自然化学分析調査においてSA－03と08から出土した炭化材とSA－12から出土した種実の実態分析をおこなった。その結果、SA－03の炭化材はツブラジイとシイ属、SA－08の炭化材はツバキであるとの報告を受けた。これらの用途は不明であるが、断片での出土であることと著しく炭化黒変していることから、薪炭材に使用されたものと考えるのが妥当であろう。SA－12から出土した種実はイチイガシの種子であった。完形で48個と破片で138個が出土したことに加え、食用となるものであることから、当時に食用として備蓄していたものが何らかの要因で廃棄されたのであろう。

写真図版

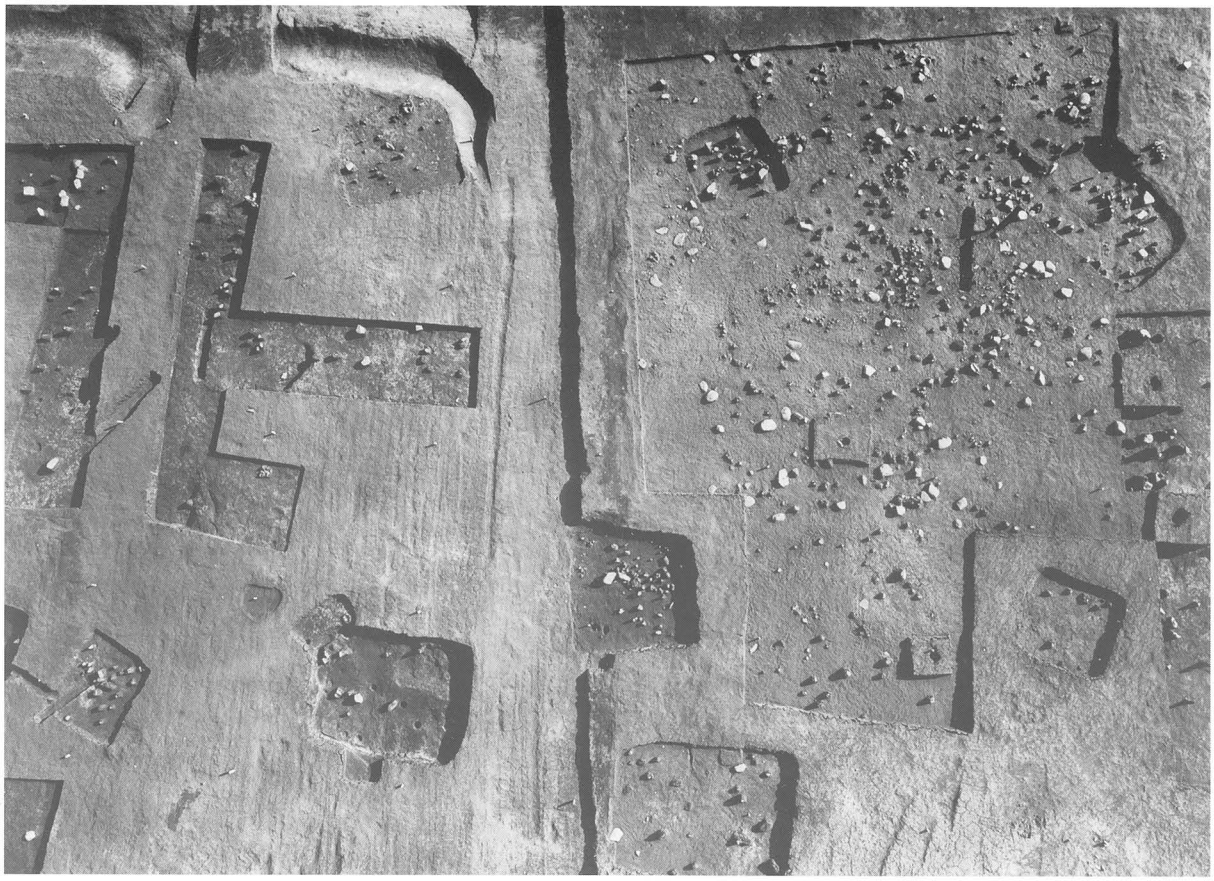
本野遺跡調査前（南西上空から）



E・F区調査状況全景（上空から）

図版 2

E・F区調査状況（上空から）



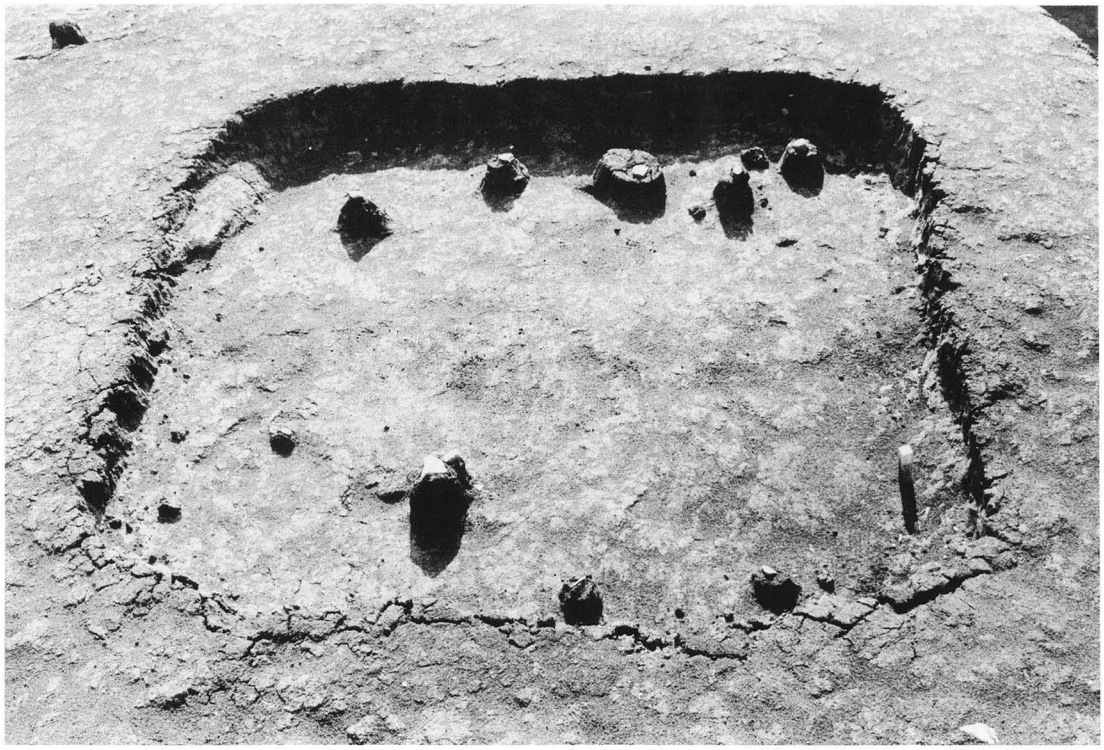
E・F区調査状況（上空から）

同　　上（東から）

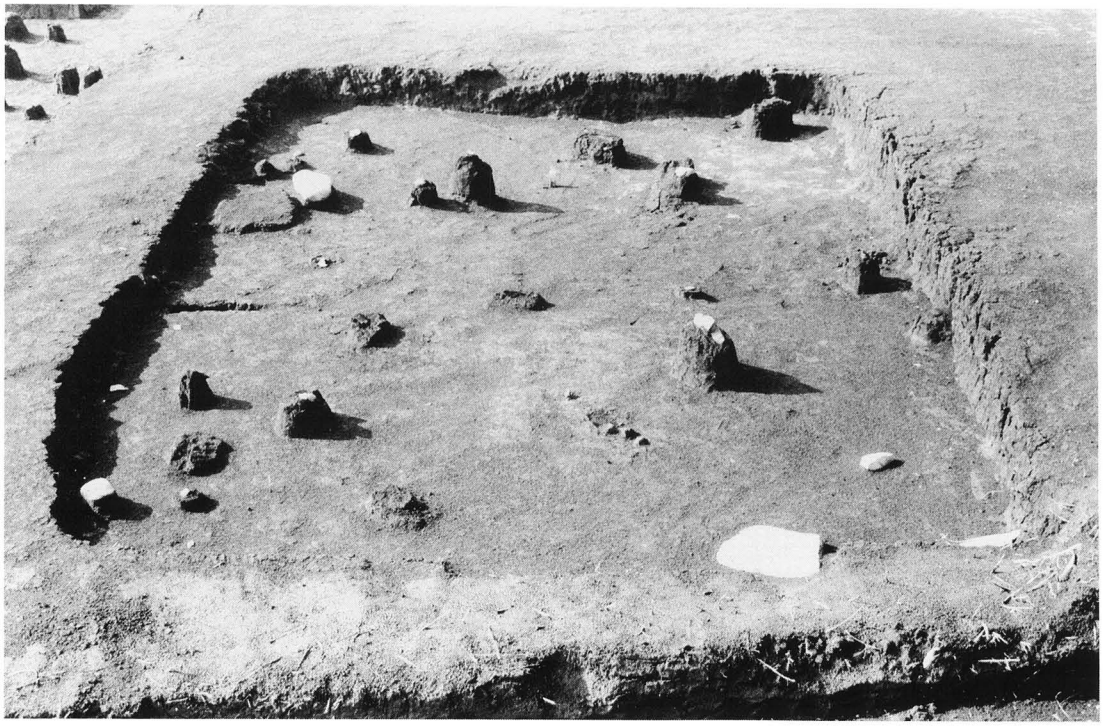
図版 4

SA－01（北東から）

（北西から）

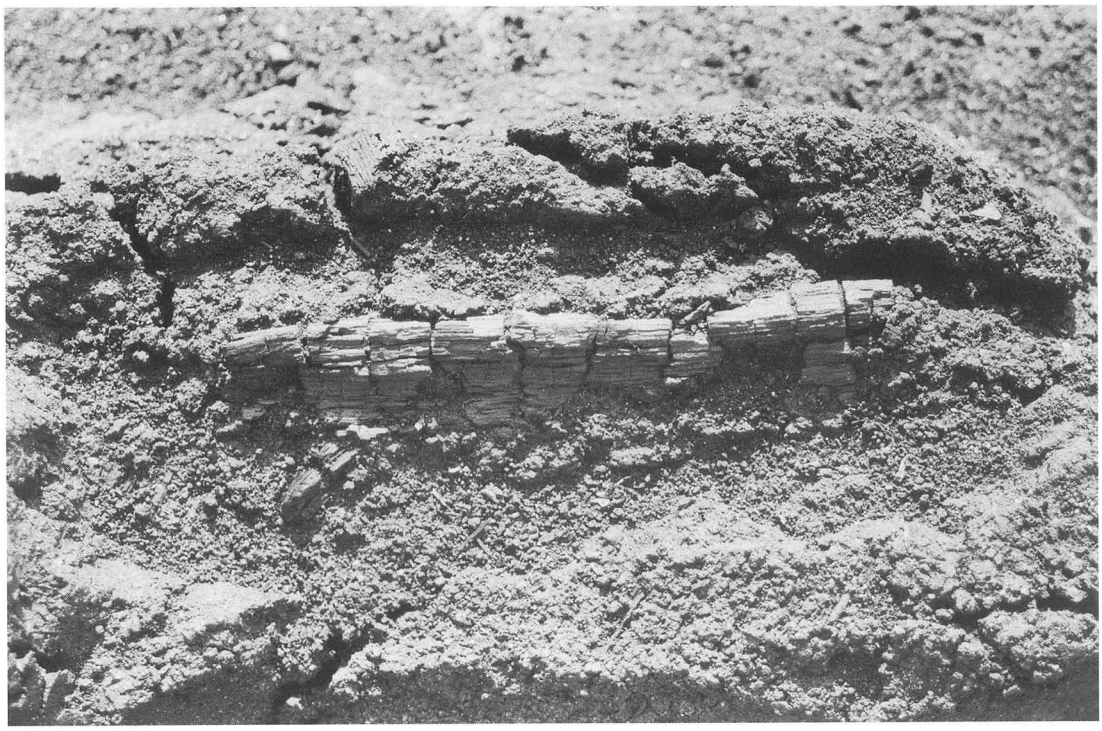


SA－02（北から）

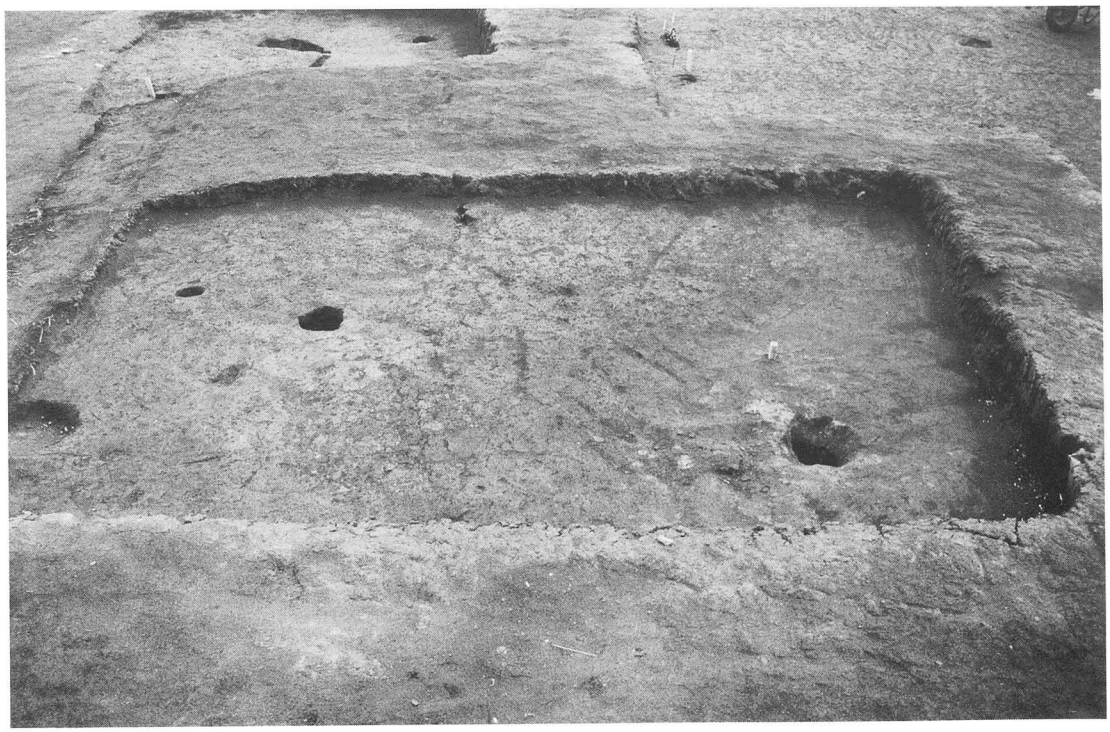


SA－03（北東から）

図版 6



SA－03炭化材出土状況



SA－03完掘状況（北西から）

SA－04（北東から）

SA－04遺物出土状況

図版 8

SA－05（西から）

SA－05遺物出土状況

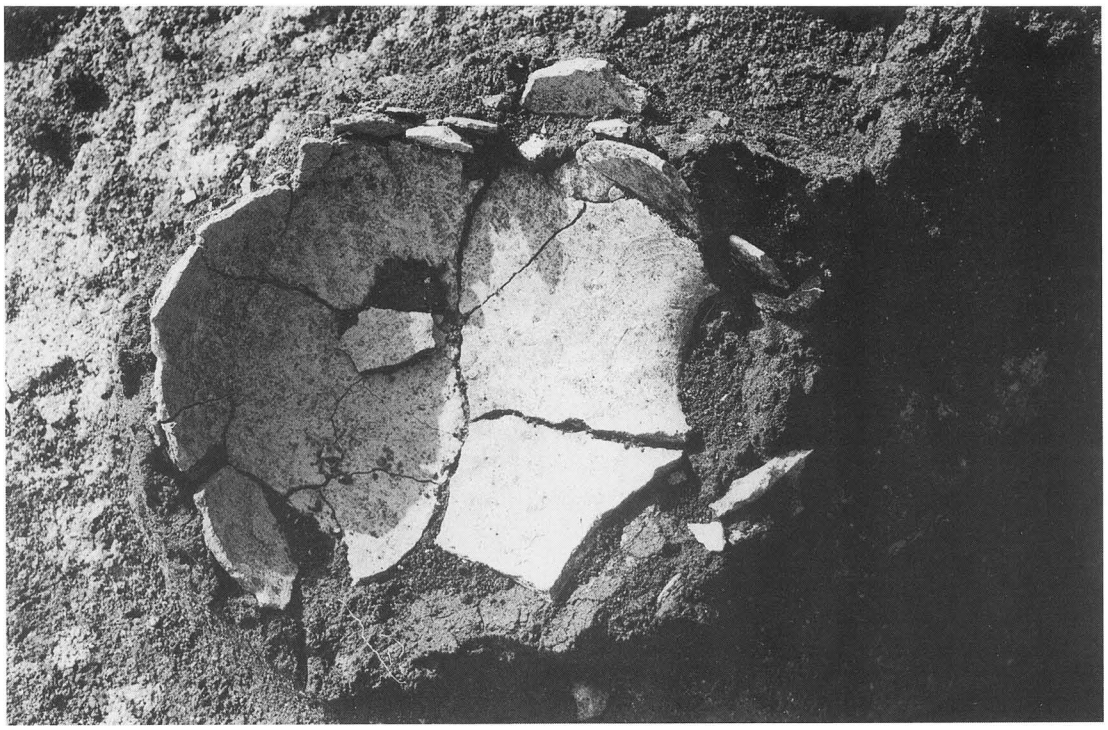
SA－06（南西から）

同上（完掘状況）

図版10

SA－07（東から）

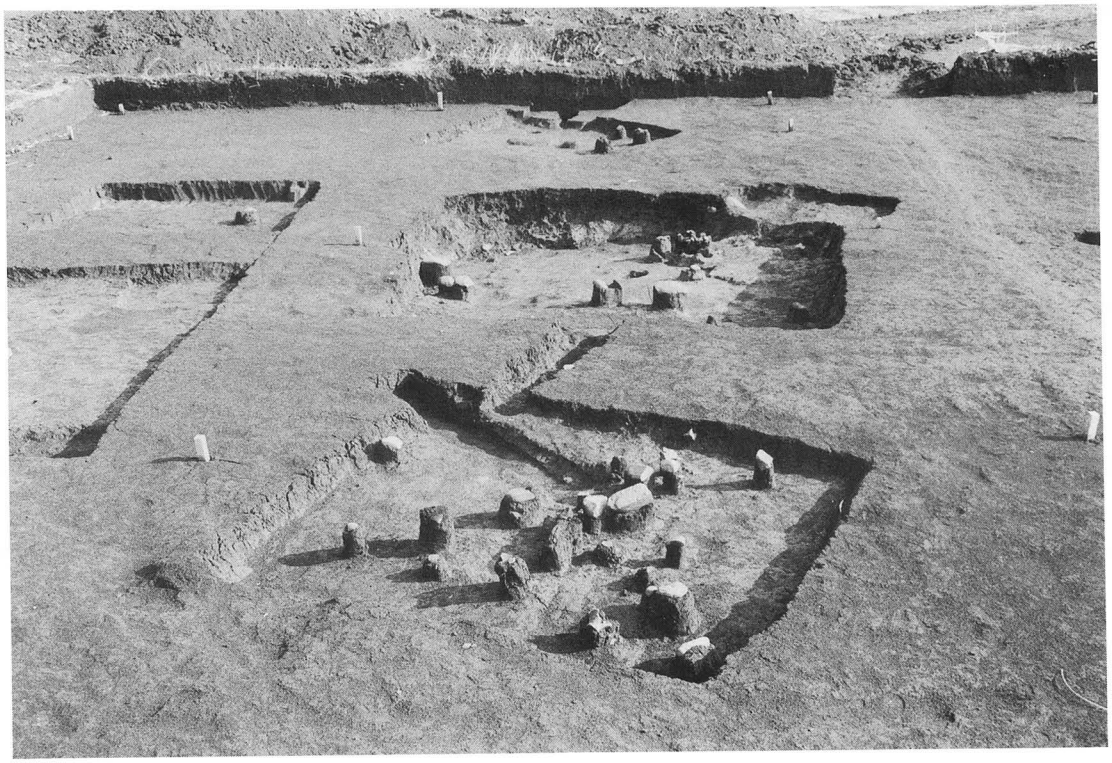
同　　上（南西から）



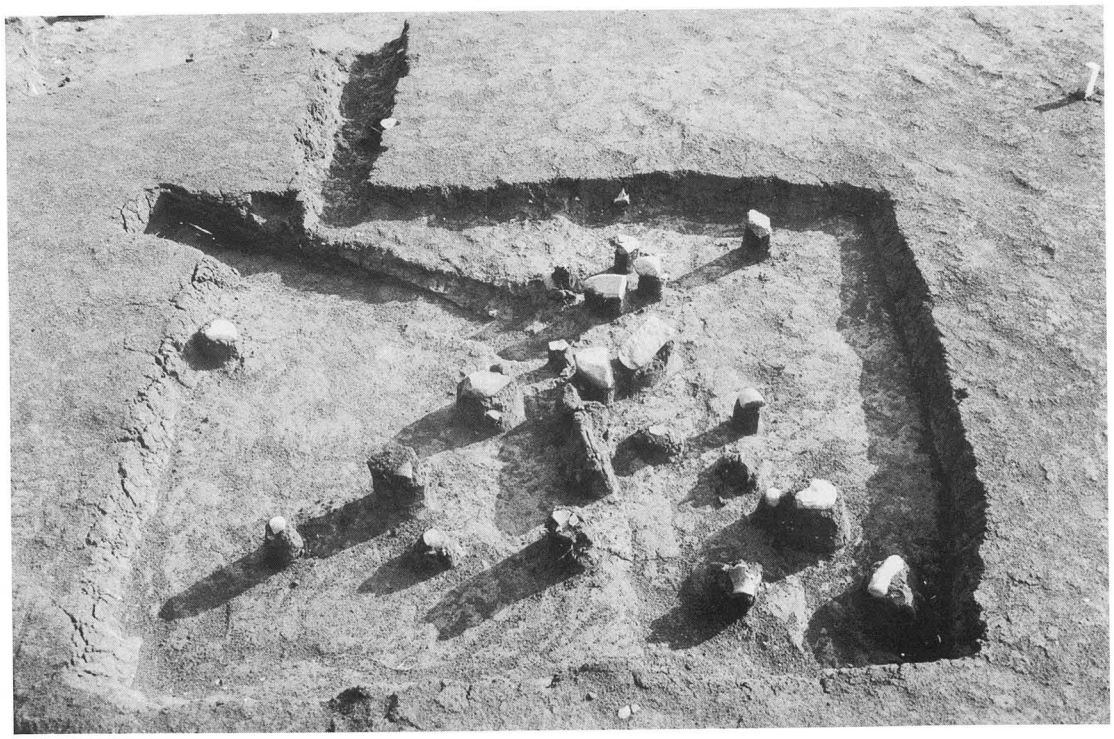
SA－07遺物出土状況

同　　上

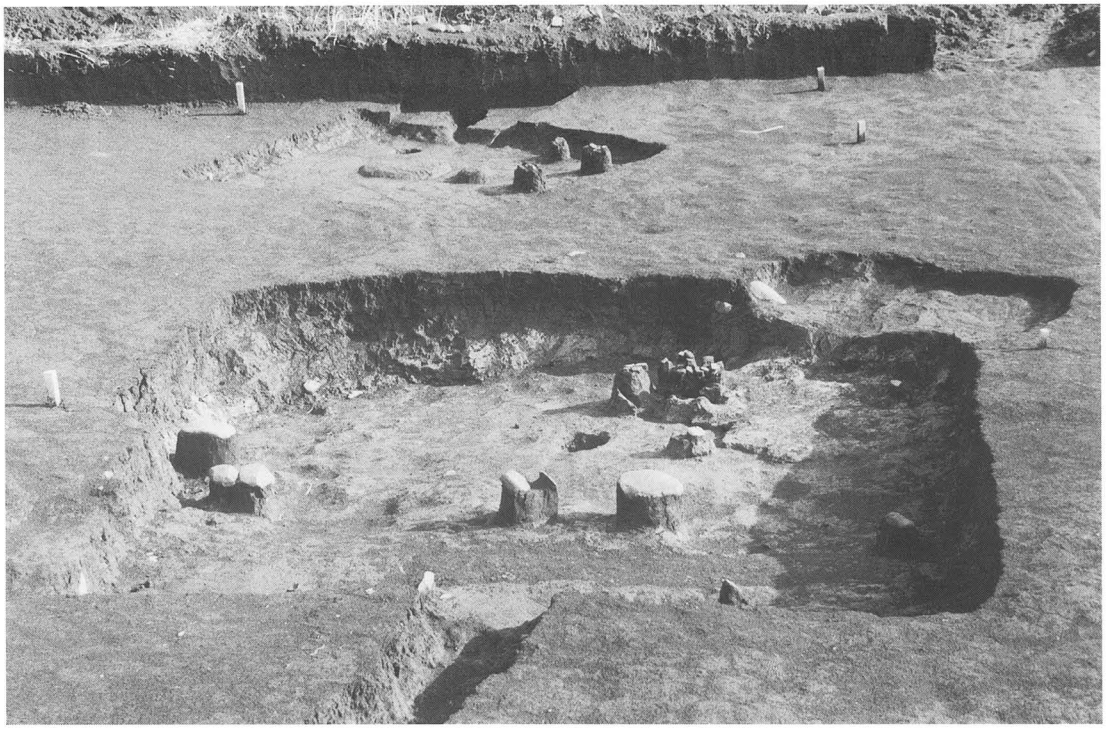
図版12



SA－08・09（西から）



SA－08（西から）



SA－09（西から）

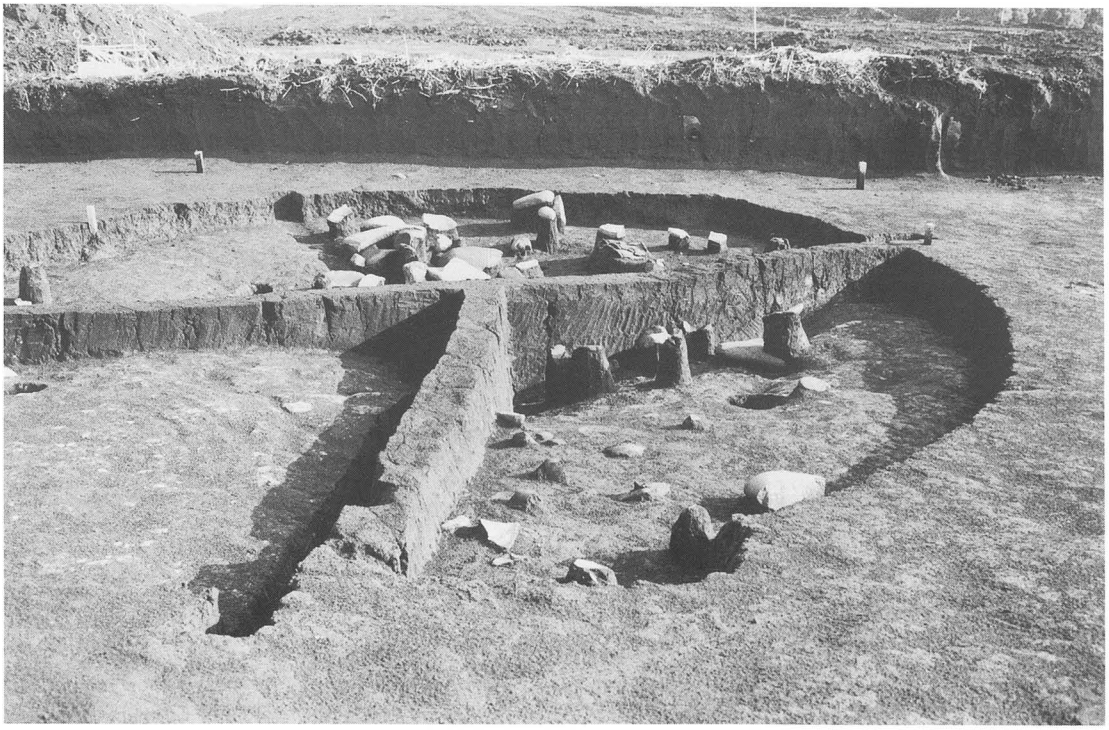
SA－09遺物出土状況（北西から）

図版14

SA－10（西から）

SA－13（南東から）

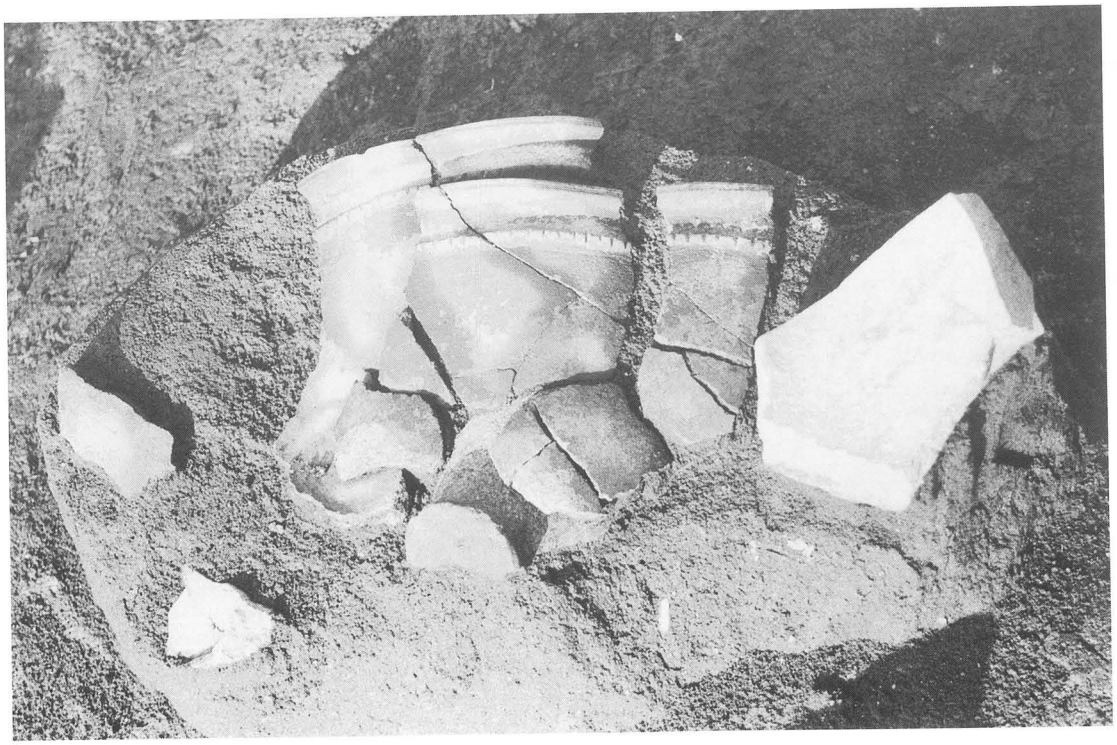
SA－11（東から）



SA－11（西から）

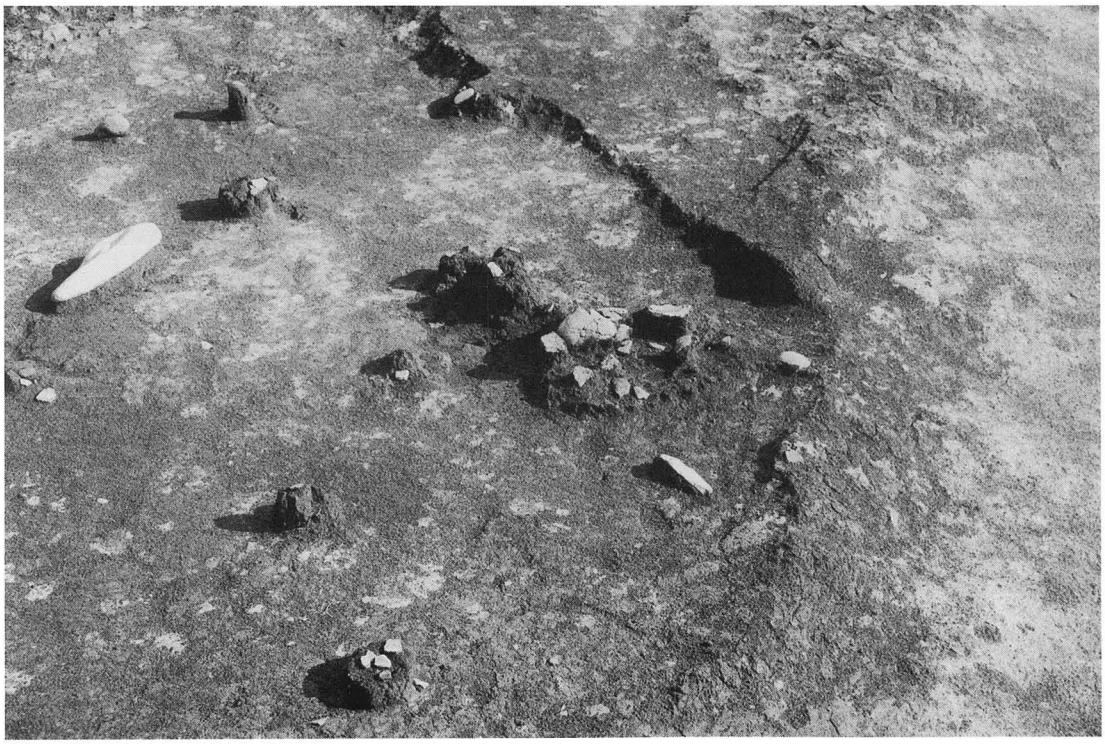
図版16

SA－11遺物出土状況



同　上

SA－12（北から）



SA－12遺物出土状況（南から）

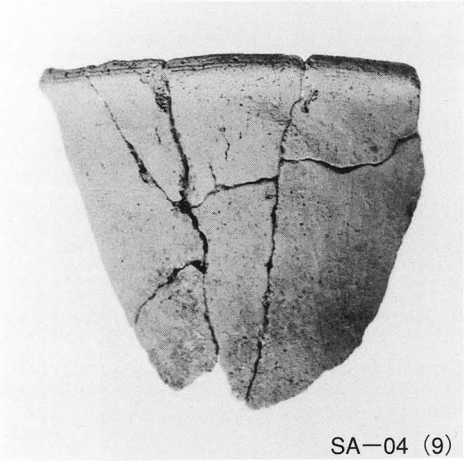
図版18

SA－1

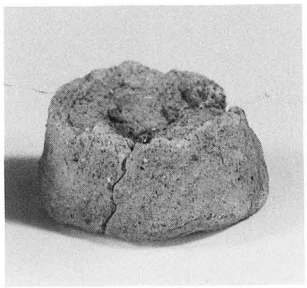
SA－04

図版20

SA—11（40）

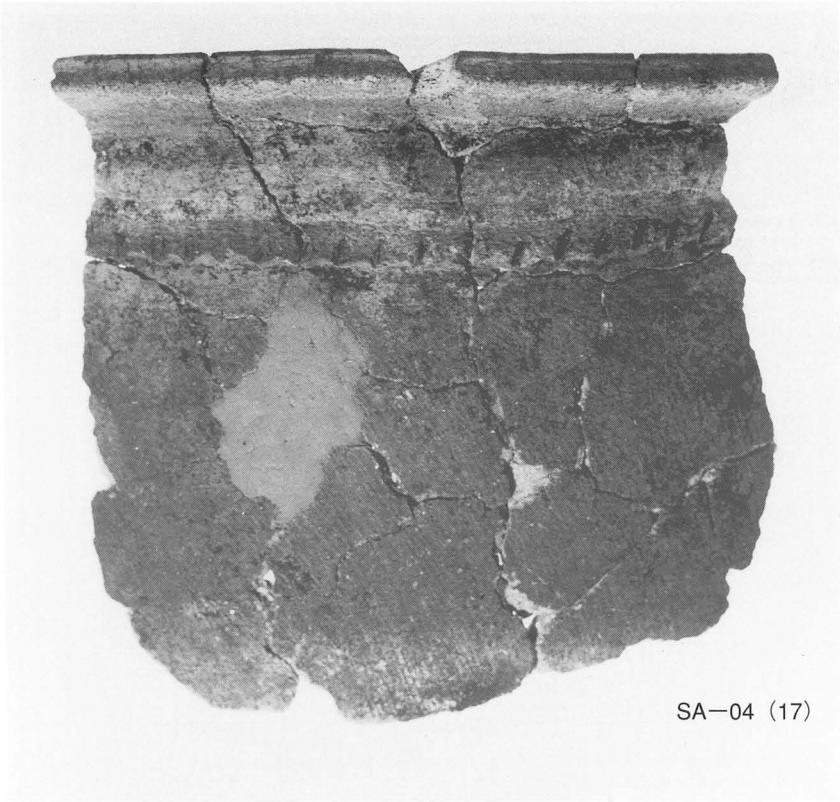


SA—04（9）

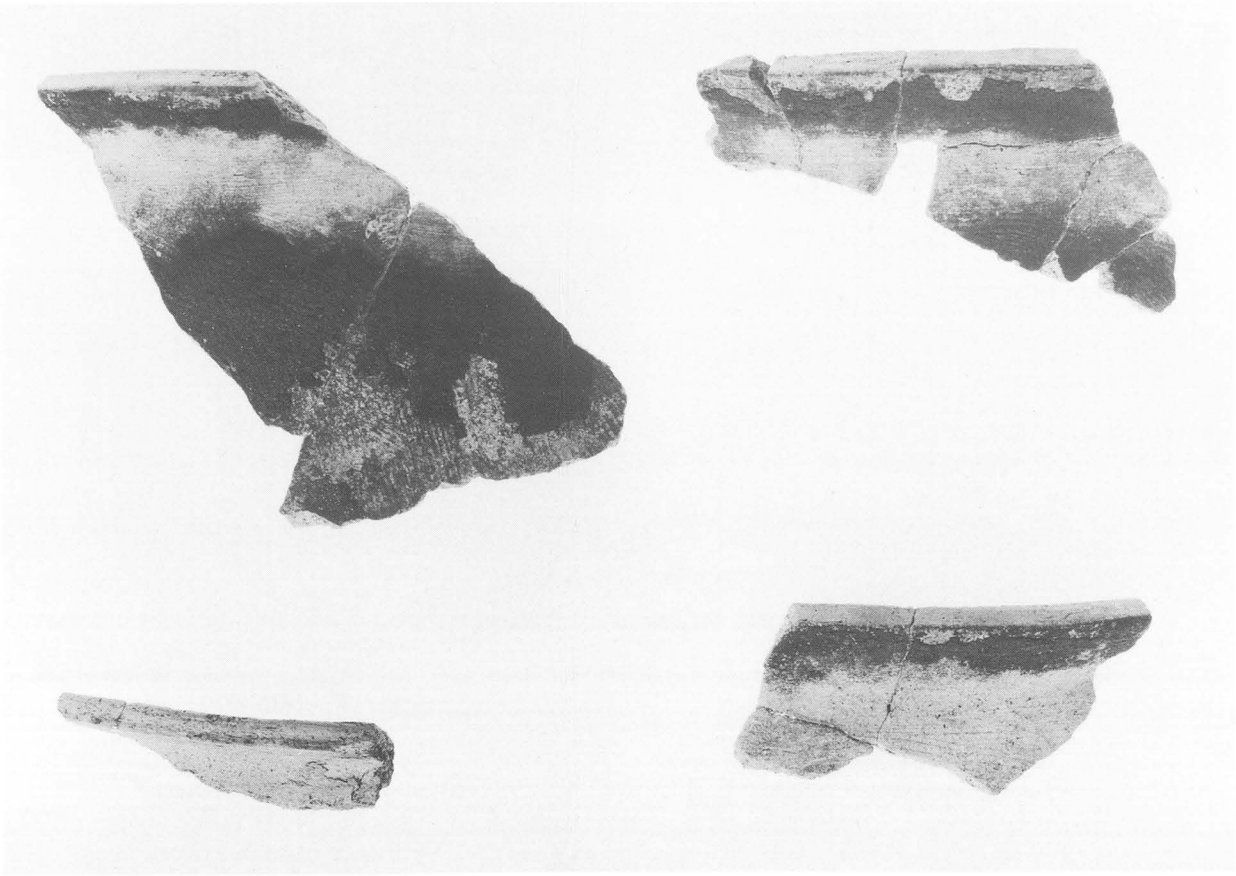


SA—04（23）

SA—04（左から15・16・14）

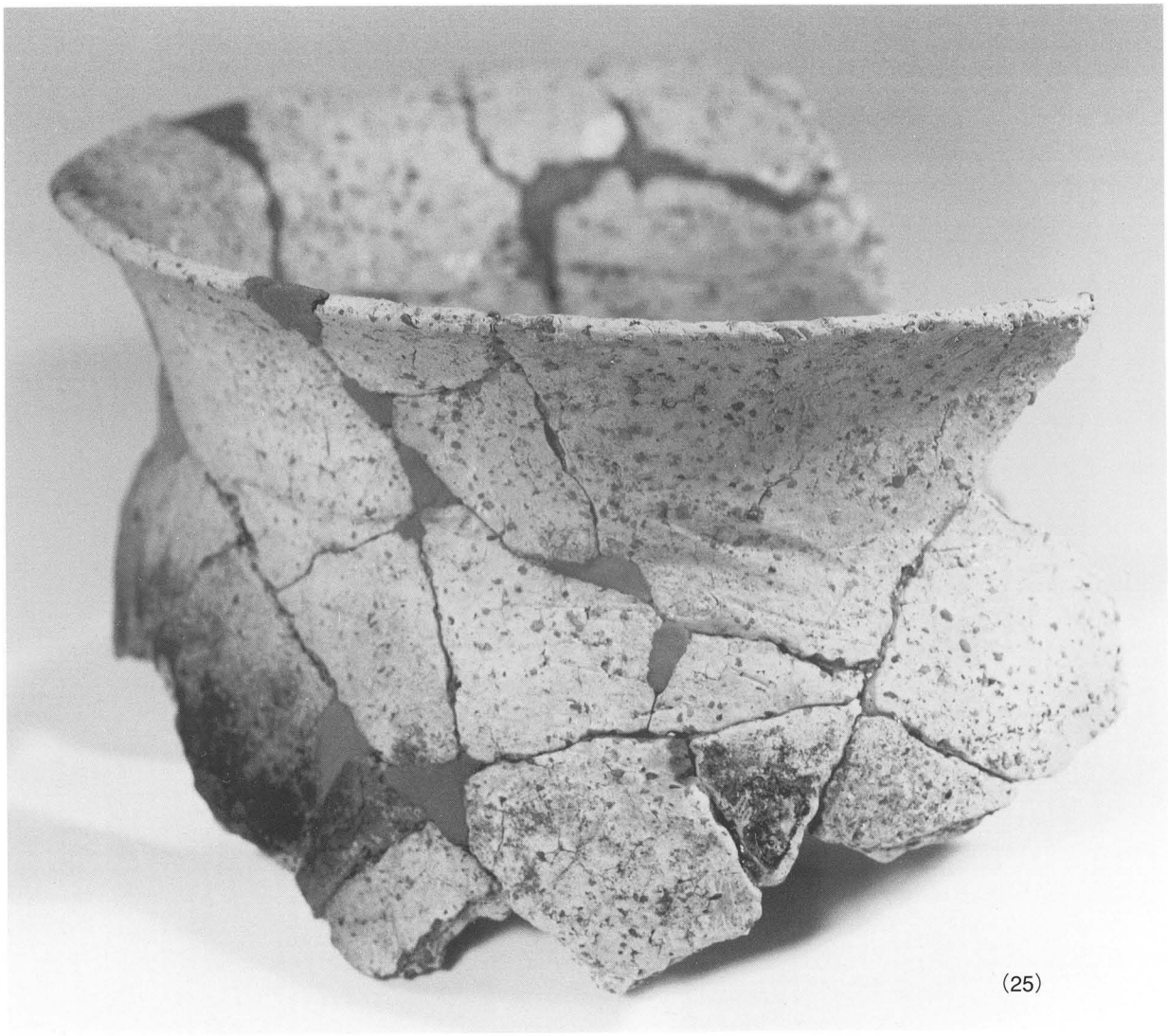


SA−04（17）



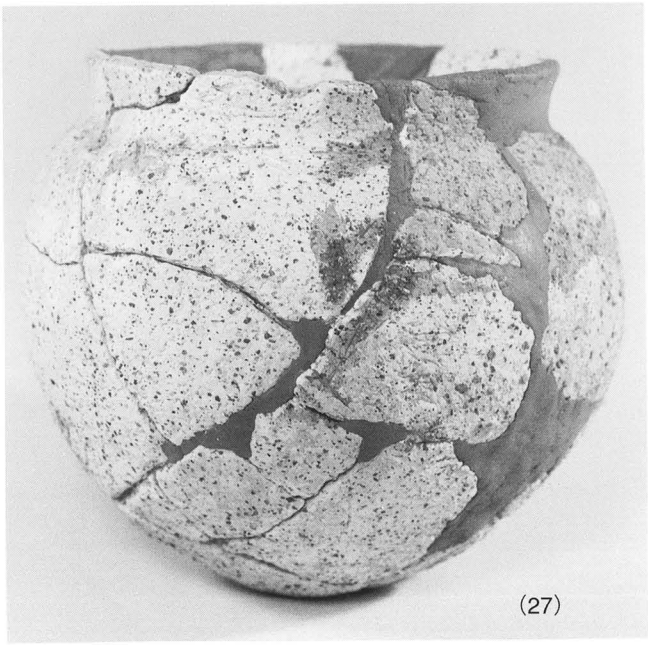
SA−09

図版22



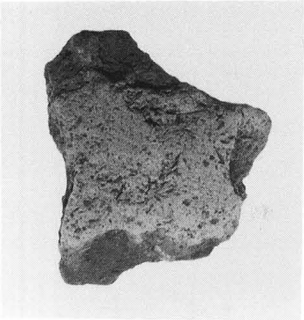
(25)

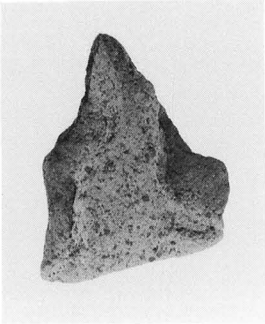
(26)

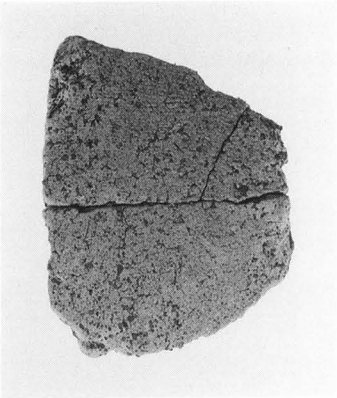


(27)

SA−05





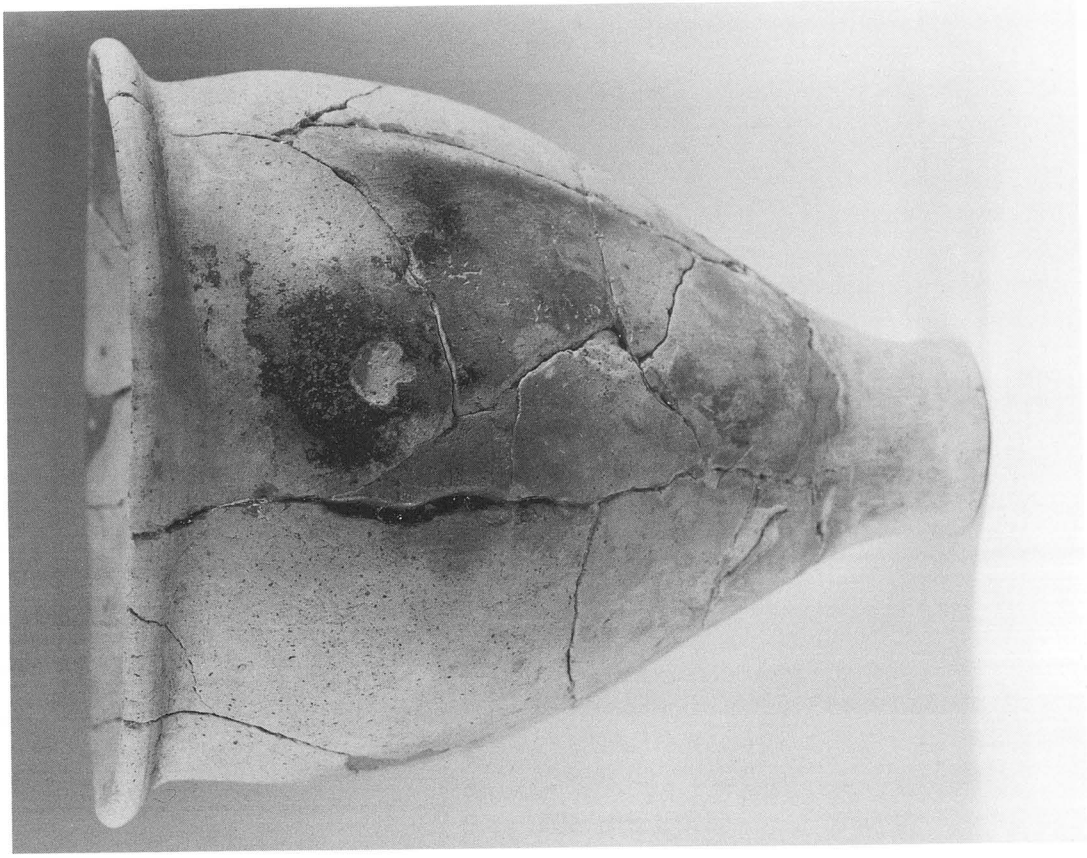


(SA—06)

SA—06 (29)

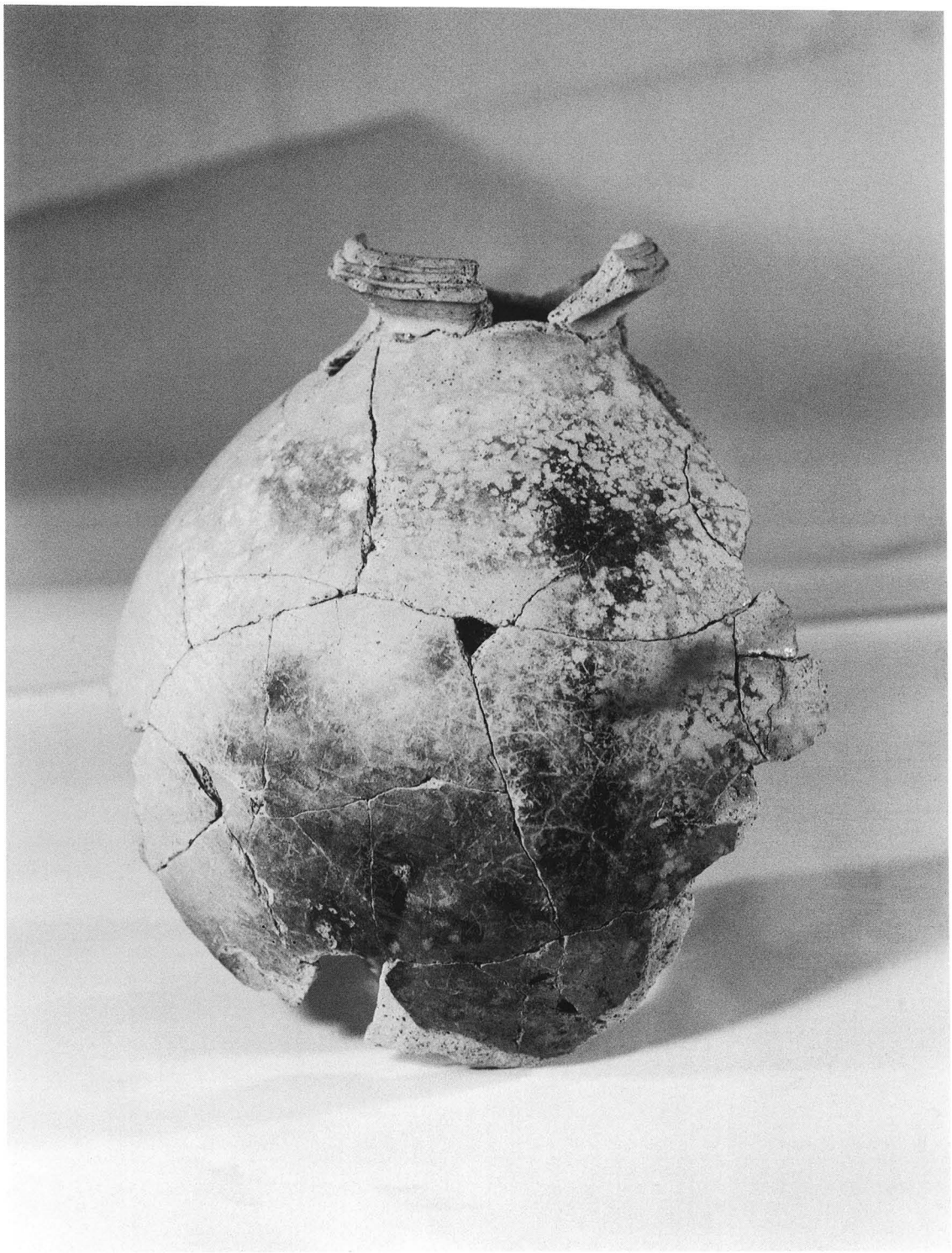
図版24

(32)



(33)

SA—07



SA－07